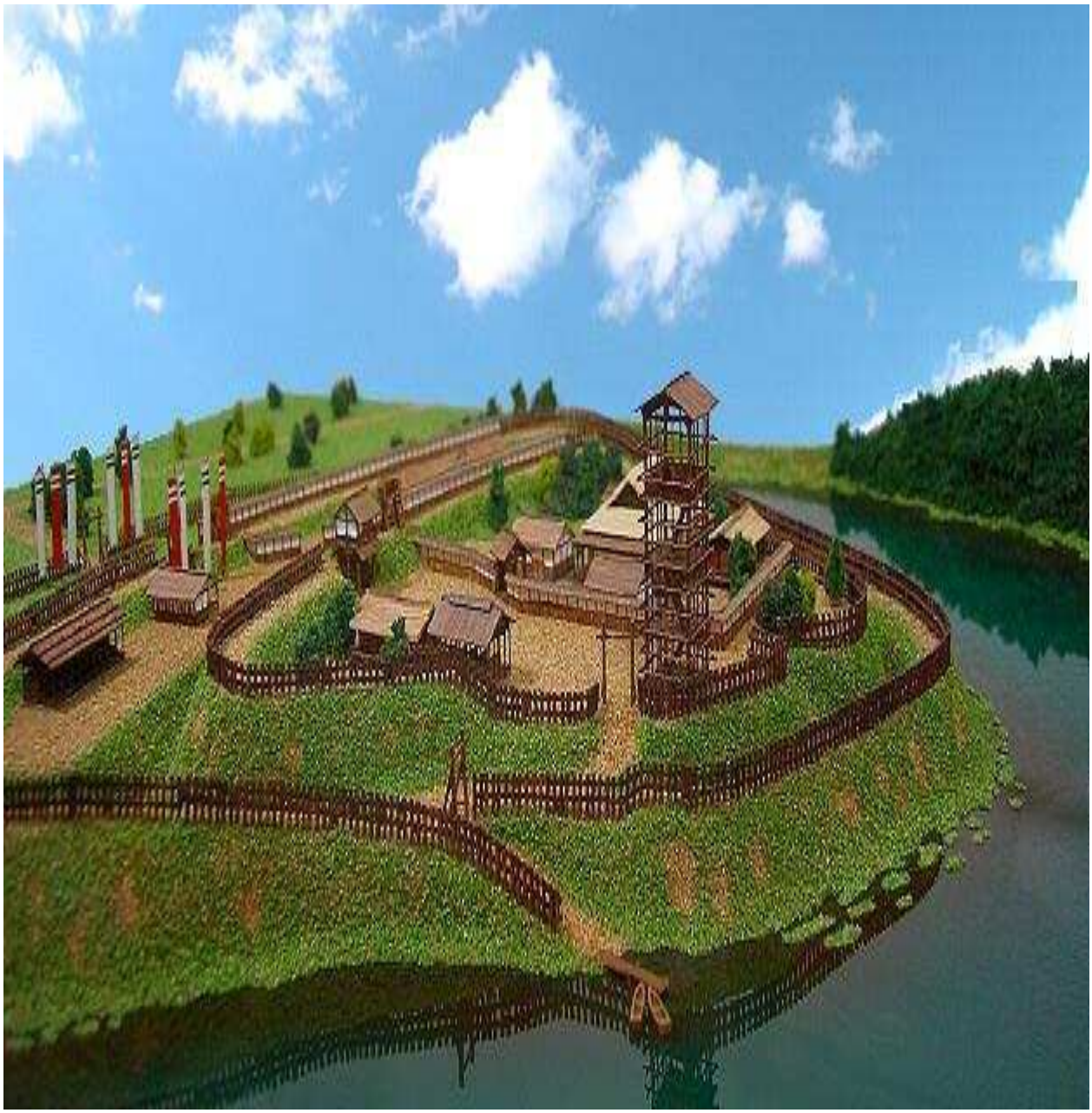
中世上総の国市原郡の城



上総の国いちはらの歴史を知る会

中世上総の国市原郡の城　　目次

２Ｐ　城の歴史・城の起源・古代からの中世の城・城の始まり
３Ｐ　城の数・中世の城
４Ｐ　近世の城　・近・現代の城　・城の種類（山城・平山城・平城・水城）
５Ｐ　城に関する名称（縄張り）
６Ｐ　城に関する名称（堀・土塁とは・城の石垣）
７Ｐ　城に関する名称（石垣の仕組み・石垣の加工法）
８Ｐ　天守について
９Ｐ　虎口・城門・櫓について
10Ｐ　市原市の城紹介　安須城・高坂城
11Ｐ　有木城（蟻木城）
12Ｐ　石川城・磯ヶ谷城
13Ｐ　飯沼城　・犬成城
14Ｐ　池和田城
15Ｐ　市原城
16Ｐ　牛久城
17Ｐ　大羽根城
18Ｐ　大宮部田城
19Ｐ　奥野城
20Ｐ　大桶城
21Ｐ　大坪城・押沼城
22Ｐ　小野山城
23Ｐ　風戸城・上高根城
24Ｐ　神代城
25Ｐ　海保城
26Ｐ　吉沢城・君塚城
27Ｐ　草刈城・小草畑城・古敷谷大代城
28Ｐ　金剛地城
29Ｐ　佐是城・椎津城・正法山砦
31Ｐ　市東城・下矢田城
32Ｐ　白船城・真ヶ谷城
33Ｐ　雀ケ埼城
34Ｐ　高倉城・高田城・鶴舞城
35Ｐ　月崎城の腰城
36Ｐ　月崎鶚（ミサゴ）城・永藤城
37Ｐ　新堀城・西国吉城
38Ｐ　根古屋城
39Ｐ　根田城・能満城
40Ｐ　葉木城・畑木城
41Ｐ　原田城・引田城

42Ｐ　百枚田城・平蔵城

43Ｐ　平蔵城部田城

44Ｐ　琵琶首館

45Ｐ　奉免城山城・本郷金明城

46Ｐ　南岩崎城

47Ｐ　皆吉城・皆吉堀之内館・皆吉橘禅寺城

48Ｐ　村上城

49Ｐ　山倉城・山口城

50Ｐ　山小川城・山田城・分目要害城

城の歴史（～中世）

磯城（しき）や葛城（かつらぎ）、高城（たかぎ）や稲城（いなぎ）など、古代にまで遡ることのできる地名で「城」が付くものの多くは「城」を「き」または「ぎ」と読みます、「き」とは「柵」とも書くことから、周りを柵で囲まれた建造物のことが、後の城の原型だと考えることが出来ます。ここでは、日本における古代から中世にかけての城の変革をたどっていきます。

1・ 城の起源

日本における城は、古代の西日本に残された神籠石（こうごいし）の遺跡や、東北に多く見られる城柵と呼ばれる軍事的防衛施設にその端を発すると言われている。現在では弥生時代における集落の発掘調査によって、日本における城の起源をそれらの集落自体に求めるという、新しい解釈が定着しつつある。その一つが大阪府の観音寺山遺跡や山口県の吹越原遺跡にみられる高地性集落で、丘や山の上に集落をつくり、地形を利用したり一部は切り崩したりすることによって集落を独立させ、外部からの侵入を防ぎました。これらの集落から平地に少し下ったところにあるのが環濠集落です。佐賀県の吉野ケ里遺跡が有名ですが、ここには堀を掘ったり周囲を柵で囲ったりするなどの、従来の城に見られる特徴が表れるようになります。時代としては、卑弥呼が倭国の女王であった2世紀頃に多いとされ、神奈川県の大塚遺跡では、集落にある住居全体を囲う環濠の存在が明らかにされている。

2・ 古代からの中世の城

4世紀から6世紀にかけて、九州地方を中心として神籠石（こうごいし）と呼ばれる物が築かれるようになった。福岡県の高良山、女山（ぞやま）、佐賀県の帯隈山（おぶくまやま）などに見られる神籠石は、山城の一部として作られていると思われる。

このように山の上に城を築くというのは、城主にあたる人物の所有する兵力が小さく、また敵に攻められにくい場所を選んだという背景がある様です。日本が大和朝廷により律令国家としての体裁を整えるようになると、東北地方には城柵が多く築造されるようになった。蝦夷の征伐、及び東北地方の経営という朝廷の目論見も手伝い、この時期には多くの城や城柵が築かれることとなる。宮城県にある多賀城は724年（神亀元年）の築城であるとされていますが、そこには大垣と呼ばれる土塁で囲まれ、また行政府としての政庁正殿跡も残っており、律令国家としての形が出来ています。

神籠石で出来た防護石垣

3・ 城の始まり

「城」という字は、古くは「古事記」「日本書紀」と言った歴史書にも見ることができる。この漢字が示す通り、「土」から「成」るものであり、さらには「成」という字は「盛」という字に通じ、土が盛られたものが「城」であるということができる。室町時代には、既にこの「城」という字を「しろ」と読むようになっている説

がある。外敵の侵入を防ぐためには、まず周りに堀を造ります。堀を作った後には、その分の土が余るので、それを盛り上げることで城が出来たと言われている。これを始まりとして、時代の変遷と共に城に求められる機能が変わって行くと、建てられている場所や形状などの異なる様々な城が造られことになった。例えば、山奥や絶壁、丘の上など、天然の地形を生かした城も登場した。外部の敵による侵入から身を守るだけでなく、兵力が増大していく城の中に多くの人々を収容することが必要となり、更には城の外も領地となっていくために、城はどんどん巨大化していった。

4・ 城の数

日本の歴史上、城と言われている数は25,000から30,000にも及んだとされている。その中には、古い所では簡単な柵だけで周囲を囲んだ物、または文章でしか確認できない物もある。

今でも天守や城郭が当時のままの状態で現存している物は、弘前城・丸岡城・松本城・犬山城・彦根城・姫路城・備中松山城・松江城・丸亀城・高知城・松山城・宇和島城の12城です。

これ以外のも建物の一部が残っている物や、修復された物を数えれば、日本国内で数多くの城が残されている。しかし、修復されたものでも必ずしも当時のありのままの再現をしたものは少なく、復元することのむづかしさと言える。

5・ 中世の城

中世の城の特徴

ア）鎌倉時代から南北朝時代

鎌倉時代までは館を拠点として活動していた武士が、南北朝時代に入ると山城を築くようになった。楠正成の千早城や赤坂城に代表されるような、反政府勢力の対抗措置として築城されたこれらの山城は山野地形を利用した軍事施設として用いられた。山上に設けられた城に合わせて、麓には居住用の館が設けられるようになり、戦国時代になると、武田信虎が築城したとされる要害山城のように、山上の城に居住スペースが作られた山城が出現をするようになった。

イ）室町時代から戦国時代

戦国時代に突入すると、城の築城数は飛躍的に伸びてゆくことになり、まさに郡雄割拠の時代に入ります。相手を打ち倒すことだけを目的とするのではなく、自分の物となった領地を経済的に運営し、政治的にも支配をしていくために、山城ではなく平地を一望できる平山城が丘陵に多く築かれるようになりました。

このことは、城が臨時的ではなく恒常的な目的を果たすための建物となったことを意味しています。

また、戦闘が1対1ではなく鉄砲などを用いた集団戦になったことも、城が平地を必要としたことの大きな要因です。この傾向が進んでゆくと、平城と呼ばれる、さらに平地に建てられた城が主流となった。

それぞれの領主が抱える戦力も家臣が増えてゆくことで、城そのものが大きくなってゆくのが特徴です。

6・ 近世の城

戦国時代が末期に至り、やがて修篤を迎えると、織田信長の安土城や豊臣秀吉の大阪城に代表されるような豪華な城が築かれるようになった。

石垣や天守、城門を備えたこの頃の城は、現在一般的にイメージされる城に最も近い物です。

江戸時代に入ると、徳川幕府が一国一城令を発布され、一大名に付き一つの城のみ所有できるとした法令で、多くの城が破棄された。

7・ 近・現代の城

明治になり、廃城令によってさらに多くの城が失われることになった。これらの跡地には役所や公園が設置されている。その後に軍の駐屯地となった場所では第二次世界大戦で米軍からの攻撃対象とされている。

現在も天守閣が残っている城は 12 城となっている。戦後になると城の修復事業が盛んに行われるようになり、かつての資料に基づいた復元事業も行われ、姫路城や首里城跡が世界遺産として登録されるなど、町おこしや観光地としても利用されている

8・ 城の種類

日本の城は、大きく分けて山城、平山城、平城、水城4つに分類ができる。これらの城は、どのような地形の上に建てられたかによって区別されたものです。それぞれの種類には、時代を象徴した特徴が現れており、城郭の構造にも違いがある。

1) 山城

山城はその名前の通り、山に築かれた城で、主に、南北朝時代から戦国時代初期に造られた城で、いわゆる「中世城郭」と呼ばれている城は山城になります。山城は、山全体を城郭としており、山を削って土を盛り固め、堀や土塁を造って行く天然の要塞です。

軍事施設としての役割が強い城で、合戦の際は山頂に籠城することで敵からの攻撃を防御している。山城では、山の麓に居館を構え、合戦がない時は居館で生活していた。

日本には、城址が3万から4万程あると言われているが、そのほとんどが山城と言われる。鎌倉・室町時代に、兵力を持った領主たちによる争いが増え、敵からの集落を防ぐために、簡易的な山城が築かれるようになった。

多くの山城は、石垣を用いていない土造りの城で、建造物は木造の簡易なものであった為、現在の山城跡には建物はほとんど残っておらず、遺構の多くは土塁や空堀と言ったものが多い。

2) 平山城

平山城は、低い山や小高い丘とその周囲の平地を利用して築かれた城です、最初の平山城と言われているのは織田信長が築いた安土城で、近世城郭の主流となった。

平山城は、山城と平城の中間として認識されている。一般的には、城の構造として、低い山や小高い丘の上に主郭を、周囲の平地には御殿や屋敷、城の外周に石垣や水堀を設けている城を平山城と呼ぶ。

山城との大きな違いは、平山城は山頂から麓までを一体化した構造になっている。

安土桃山時代以降は、合戦の防衛拠点としてだけでなく、政治や経済の拠点としての役割も担っていた為、軍事的な要塞としての役割が強い山城と異なり、利便性の高い平地を御殿や屋敷の為に使っていた。こうして多

くの家臣たちを、山城のように城の外部ではなく、城の内部に住まわせることも可能にした。また平山城は、平地より高い場所に城を築いて山頂に天守を構えることで、権威の象徴として見せる事が出来るメリットもある。

3） 平城

平城は、平地だけを利用して築かれた城で、平地に築くことにより、領主は領地にそれまでより多くの兵力を収容が出来るように成りました。平城は、戦国時代の終わりから江戸時代にかけて造られた、近世城郭の種類の一つになった。戦乱が治まり、世の中が段々と安定してゆくと、城は軍事拠点としての顔を持ながら、政治や経済の拠点としての役割が大きくなっていった。また、権力を象徴としての意味も強くなり、領国を治める役所としての機能が備わるようになった。その為、城の周わりに城下町を作り多くの家臣を住まわせ、城郭の中心部には成務を行う政庁としての御殿が建てられた。代表的な城として、二条城や松本城などがある。

4） 水城（海城）

水城は、海や河川、湖と言った水源のある場所を巧みに利用して築かれた城です。天然の水源を引き込んで水堀を造ることで、防御面が優れていることはもちろん、水運を利用した商業面でも活用できるという利点もある。しかし、海岸や湖岸を埋め立てる技術や水土木作業の難しさ、水害によるデメリットなどもあるため、数としては多くない。海に接する場所に築く水城は、海城とも呼ばれる。また、縄張りにおいても他の山城や平城などと違い、「舟入」と呼ばれる船着き場を備えている。中世や近世においては、物資を輸送する際は水運が主流で、中でも特に開運が利用されていたので、水城は商業を発展させるにあたり、大きな利点があった。そして、舟入を備えていることで、合戦で籠城する際に必要な物資の調達がしやすく、なおかつ、逃走経路が確保しやすいという利点がある。代表的な城は今治城や高松城、中津城が日本三大水城という。

9・ 城に関する名称

ア） 縄張りとは

築城に先立ち、立地を決めてその地形に応じて構成を考えることを城取と言い、具体的な区画割りや、塁壁、虎口（こぐち）、櫓や井戸などの位置を平面図で示し、それに基づき実際に現地に縄を張ることを縄張りという。
やがて城における各部の配置の事を縄張りというようになった。
現在では、特に曲輪（くるわ）の配置の事を縄張りと呼ぶ。

イ） 縄張りの種類

曲輪の配置により縄張りを分類することが出来ます。

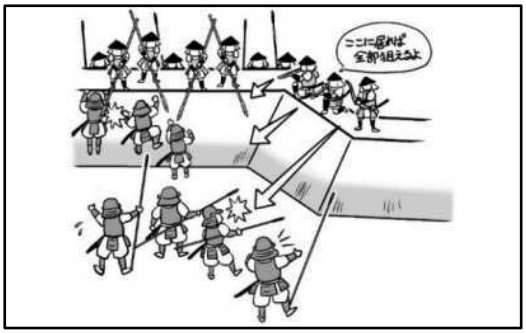
1） 連郭式（れんかくしき）

本丸と二の丸、三の丸が一直線で結ばれた配置された縄張りです。山の尾根など、城を横に拡げることが出来ない際に用いられる縄張り。

2） 平郭式（へいかくしき）

連郭式から並列する三の丸が無くなった物を言うことで、連郭式と同様の縄張りであると考えられる。例えば大垣城の場合は、三の丸が本丸と二の丸を取り囲むように配置されていて、これが三の丸が輪郭式に加えら

れたと思われる。



3）輪郭式（りんかくしき）

円郭式とも呼ばれ、本丸を二の丸が取り巻き、更に二の丸を取り巻く三の丸が存在する縄張りで、これにより本丸の防御は強力になるが、二の丸が手狭になってしまうなどの欠点がある。

山形城や米沢城がこれにあたる。

4）梯郭式（ていかくしき）

本丸の二方もしくは三方を二の丸が取り囲んでいる縄張りで、近世になって最も主流になったのがこの縄張りと言われる。本丸の背後に谷や河川と言った地形が存在すると、この縄張りが適している。岡山城や広島城、熊本城がこれにあたる。

5）稜堡式（りょうほうしき）

城壁の突き出し部である稜堡を剣の先の形に配した縄張りで、元は西洋の物でした。五稜郭などが有名。

ウ）堀・土塁とは

城の本来の機能は戦いにあり、そのために戦闘に備えた多くの設備が城には設置されている。中でも堀と土塁は、敵の侵入を防ぐために欠くことの出来ない設備です。これらは、城郭建築の発展や戦いの方法とともに様々な変化をしています。

1）堀の歴史

城の堀というと、多くの人が城郭を取り囲む水堀を想像しますが、中世では多くの城が山城と呼ばれ、山の地形を活かしたものでした。その為、ほとんどの城が水を使わない空堀でした。

その後鉄砲が伝来し、戦いの方法が変わり、ほとんどの城が平地に築かれる平城や平山城になった近世では、堀の主流は堀と成りました。水堀は、幅が広いほど敵の侵入を防ぐことが出来ますが、それにも限界があるため、菱を植えたり水鳥を放したりしておくことでさらに防備能力を高めるように工夫されている。

現在では、多くの城郭で中堀や外堀が埋め立てられてしまいましたが、名古屋城などでは外堀が残っている。

2）堀の種類

堀には、空堀と水堀があり、空堀は山の地形を切り崩すことで作られている。尾根を切断したものを掘切、山の斜面を縦切りにした物を竪堀という。また、堀の形によって薬研堀（やげんぼり）、箱堀、毛抜き堀などがある。敵が堀を渡ることを防ぐために堀の中に細かく区切って造られた土手を堀障子と言いますが、これのある堀は障子堀と言われる。

水堀は、城の内側と外側に多重に造られることが多く、これが二重の場合は内堀と外堀、三重に及ぶ場合は、内堀、中堀、外堀という。また、外堀のことを総堀ということもある。

3）土塁の特徴と歴史

土塁は石垣と同じように城郭の防衛線ですが、傾斜が出来るように土を盛ることで外部からの敵の侵入を防ぐことが主な役割です。また、城郭の最も外側に築かれていたことが特徴です。

山城では山の傾斜自体が土塁のような物であるため容易に造ることが出来ますが、平城や平山城では平地の状態から土塁を造らなければなりませんでした。土そのものを運ぶ必要がありますが、堀を掘った際に余った土を用いることが通例となっている。明治以降は多くの城郭が外側の部分を取り壊してしまった為、残った形を見ることがあまりできない。

エ）　城の石垣

城の石垣（城壁）とは、様々な種類の石を積み上げて作られた壁や柵のことで、城の特徴の一つです。

石垣に用いられる石材は、自然の意志のまま使用する場合と加工して使用する場合があり加工技術や

石垣の積み方にも種類がある。

1) 石垣の歴史

日本の城に本格的な石垣が築かれるようになったのは、安土桃山時代から江戸時代にかけての近世に入ってからのことです。それまでの中世城郭は、ほぼ土（土塁）だけで造られた山城で、石垣をほとんど見ることが出来ない。石垣造りの原点となるのは、織田信長の築いた小牧城や岐阜城と言われているが、近世城郭として初めて総石垣で築かれた本格的な城は安土城です。

2) 石垣の仕組み

城造りの要でもある巨大な石垣を築くには、まず材料となる石材を調達して運ぶ必要がある。

石垣に用いる石は、巨岩に切り取り線のように穴をあけ、巨岩を割ることで石材を採取する方法が一般的です。時には、石材を海路で運んでいたこともあり、城造りは、まさに一大事業です。石材が不足している場合は「転用石」と言って、石仏・石棺・墓石・燈籠など別の用途に使われていた石を石垣に使う場合もある。

石垣は、その上に櫓や天守と言った巨大な建造靴を載せる場合もあり、それに耐える強固な石垣を築くためには、多様かつ高度な技術が必要とされています。城郭は何度も改修を行う場合もあるので、一つの城の中に種類の異なる石垣が造られていることも珍しくない。

頑丈な石垣を造るためには、基礎固めが重要です。石垣には、すべて同じ石が使われているのではなく、大きく分けてまずは、礎石として一番下の根固めをする「根石」と、根石より上に積んでゆく「積み石」、一番上の「天端石（てんばいし）」が必要です。また、石垣を安定させるためには、積み石の後ろに入れる「裏込石」や栗石、積み方によっては、積み石の隙間を埋める「間詰石」（あいづめいし）など、どのような石垣を造るかによって様々な石材を用意する必要がある。

3) 石垣の加工法

① 野面積み（のずらずみ）

野面積みとは、自然の石を加工せずに、そのままの形で積み上げていく方法で、石垣が造られ始めた頃の手法に、野面積みが使われた。自然の形のまま石を積み上げてゆくため、石の間に隙間ができてしまいますが、そこに「間詰石」という小石を詰めていくのが一般的な野面積みです。間詰石を入れて隙間を埋めるということは、見た目を整えるだけでなく、敵が石垣を登ろうとする際に足場をなくすというためでもある。

また、隙間があることで、雨が降った際には水はけが良くなるため、石垣が崩れにくいという利点がある

② 打ち込接ぎ（うちこみはぎ）

打ち込接ぎは、石を積んでゆく際にできる隙間を減らすために、石を砕いて表面を平たく加工してから積み上げて行き方法です。石を加工する為、野面積みと比べて手間はかかるが、高くて急な石垣を築くことができる。

打ち込接ぎは近世城郭で良く採用されており、熊本城や姫路城などの石垣が有名です。

③　切込接ぎ（きりこみはぎ）

切込接ぎは、石垣の隙間ができないように、石の表面や角などを削り、更に四角に整える加工をして石同士を密着して積み上げていく方法。切込接ぎは、石の隙間がないため、雨が降った際に排水ができるよう石垣に排水口を設けている。石垣の技術が発展していった江戸時代に使われた方法で、江戸城や大阪城などの石垣に見ることが出来る。

オ）天守について

私達が城を思い浮かべる時、最も象徴的なのは天守です。現在「現存天守」と呼ばれるものは日本に12建築のみですが、歴史を遡ってみると、実に多くの天守が造られていたことが分ります。

1)　天守の起源

天守は、古くは古代の城に設けられた楼観や戦国時代の城にある井楼（せいろう）にその起源を求めるという説があるが、天守の原型とされる建物を、16世紀中ごろに建てられた二重、三重の大櫓に見ることが出来る。最初に天守を設けたと言われる岐阜城を織田信長が築城しましたが、内部は高級感のある書院造りにしたと言われています。

2)　天守の発展

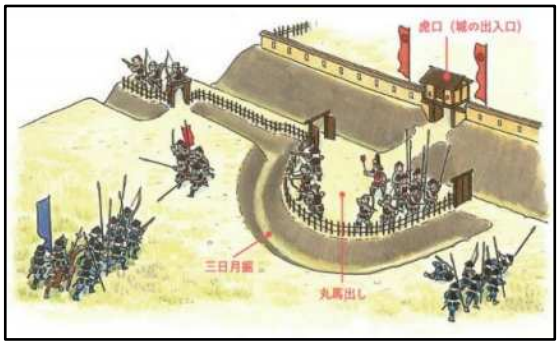
信長が初めて建てた巨大な天守という特徴を推し進めたのが豊臣秀吉でし。秀吉は天正11年に大阪城を、文禄元年に伏見城を築城しましたが、いずれも巨大で絢爛豪華な天守が設けられました。

特に大阪城の天守は、その内部に金の茶室があったとされて、客人を迎え見学させることが自慢としていたという。その後、天守はどんどん高層化して行き、徳川家康が築城した名古屋城の金の鯱（しゃちほこ）は有名です。

3)　天守の終焉

徳川体制が敷かれ、1615年（慶長20年）に一国一城令が公布されると、一人の大名に付き一城しか所有することが許されなくなり、後に公布された武家諸法度では、新たに代を築くことや増築することが禁止されました。これにより、新しい天守が造られることは無くなり、火災などで焼失した場合にも財政難で改築できず、天守が失われたままの城が多くなった。

カ）　虎口・城門・櫓について



築城に際して重要なのは、第一に敵の侵入を防ぐことです。そのために城を建てる地形を選定し、また城郭の外側や内側にも防御線が張られる。特に配置された設備のどれをとっても、戦いを想定して建てられている。ここでは、そのような城の設備の中でも虎口（こぐち）・城門・櫓について紹介します。

1）　虎口の果たす役割

虎口は小口とも言い、その名前の通り、元は曲輪へと通じる狭く小さな入口のことを指しています。
つまり虎口とは城門のことでもあるのですが、これがなぜ「虎」という文字を当てはめているのかというと、侵入者にとってそこが「虎が潜むかの如く危険な場所」だったからで、虎口は入るとすぐに折れ曲がっている。仮に多勢の侵入者に大挙されたとしても、その曲がり角により容易に前進されることなく、更に足止めされれば上方や背後から矢の雨を降らすことが出来るという構造です。

2）　城門の種類と名称

城門とは、城の外部から内部に入る門のことですが、構造や役割によって様々な種類に分けられる。
二階建ての門を櫓門、一階建の門を冠木門（かぶらぎもん）と言う。櫓門は大手門や本丸正門などの城の重要な門には必ず用いられる。また、冠城門から派生した薬医門・高麗門・長屋門などがある。それぞれの城門の名称は、曲輪の名前に「表門」や「裏門」を付け加えるのが通例です。　外郭の門の名には桜田門や日比谷門など地名や道の名をつけるのが主流ですが、姫路城ではかつては門が84もあったので、数が多すぎた為「いろは」の順番を用いたと言われる。

3）　櫓（やぐら）の役割と変遷

やぐらには「櫓」や「矢倉」などの表記があり、矢などの武器を入れておく倉庫であり、また攻撃する際の陣地でもありました。敵の攻撃を事前に察知するための物見やぐらの存在は、弥生時代の遺跡からも既に見つかっており、非常に古くからあるものといえる。近世になると、天守ほどの高さはないものの、熊本城にある宇土櫓のように三重五階建ての櫓も建てられている。

市　原　市　の　城

市原市内には多くの城跡が残っています。これらの城跡は、戦国期に建てられたもので、現在は城郭などの建物が残っているのは少ないが、土塁や城郭などが残されているものがあります。

ここでは、「市原の城」（小高春雄著）や「日本城郭体系」・「房総の古城祉」などを参考に、各城の紹介をします。（あいうえお順で紹介をしますが、例外として一部関連のある城の紹介をしています）

安須城（市原市安須）・高坂城（市原市高坂）

この城は、「市原の城」などの参考資料では「高坂城」としてあるが、実際の要害地名があるのは安須地区であるので「安須城」として紹介します。実際の地名は、ラフ図のように、１００ｍほどの距離を置いて、北側の安須地区と南側の高坂地区の両方に城郭遺構らしきものが見られます。安須城・高坂城とも城主は未詳ですが、佐是城の支城で武田氏関連の出城と思われます。

安須城は、台地基部に堀切状の切り通しによる区画があり、内部はきちんと削平された２段の平場になっていることから、小さいながら城郭があったようです。但し、臨時に建てられたもののようで、物見の砦程度の目的を持っていたようです。城の規模は、２つの郭を合わせても長軸で５０ｍ程度のもので、居住を目途としたものではないようだ。ただ、堀切を挟んだ北側の台地の西側には南北に長く浅い堀状の部分が見られるので、これを合わせると実際の城域はかなりの大きさを持っていたとも思える。また、安須城の南側にある高坂城ですが、不思な遺構を持つ城です。台地先端に近い部分に周囲を堀で囲まれたＡ部分があり、これが城らしい構造と言えるが、極めて狭い空間地域でありこの場所に城郭を建てるのは無理があると思われる。よって、宗教的な空間と思われる。そこで考えられるのは、２つの遺構は北側の安須城と南側の高坂城の共通する城の一部であり、本来の「要害」であろう。よって名称は「安須城・高坂城」のどちらでも間違いではないと思います。

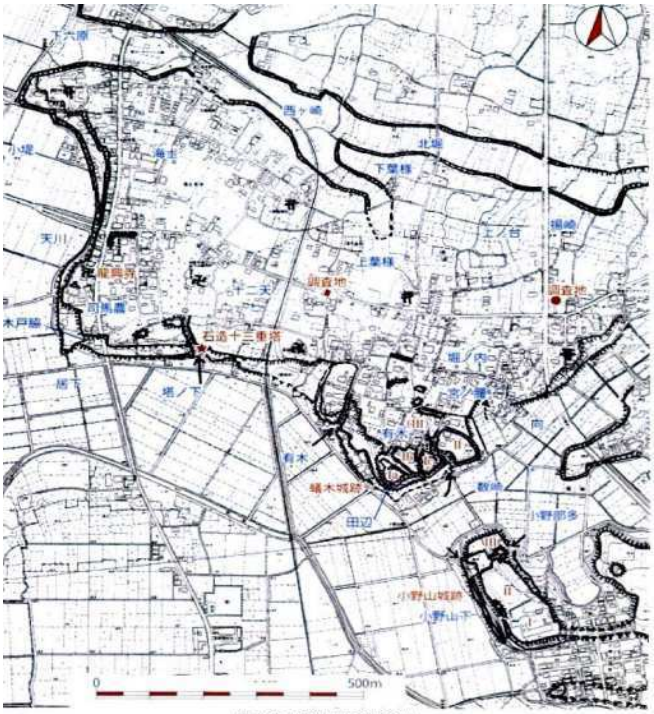
安須地区にある堀り切

安須地区から見た高坂城跡地

古墳が多くみられる

この先に牧場がある

有木城（蟻木城）（市原市海士有木）



蟻木城・小野山城の概念図

蟻木（ありき）城跡は有木城跡とも記され、養老川の中流域右側台地上に所在し、西の椎津方面、南の牛久方面も見渡すことが出来る好位置に立地しています。城中心部は有木地区にあり、その縄張りは有木、海士及び福増と山倉の一部を含む広範囲に及んでいます。
有木城は、天正４年（１５７６年）に上総に侵攻してきた北条氏の家臣の二階堂実綱によって築かれた城です。有木城跡の近くにある十三石塔は二階堂実綱の墓標であると言われています。
北条氏は椎津氏を守将として下総、相模に兵を入れた。これにより土気および東金の酒井氏も北条方に降伏してしまった。天正５年に、里見義弘は上杉家家老の直江景綱に書簡を送り、北条氏打倒の応援を頼んでいます。さらに、里見氏が攻撃を仕掛けて落城させた。
その戦いで椎津中将は討ち死にしたという話があるが史実は不明です。このように歴史的経緯ははっきりしているが、かつての「本城」、「中城」「城手の下」と言った字のついた処があるということは中規模以上の規模の城郭であったようですが、その形状は台地上の宅地化が進んでしまい現在ではその形状ははっきりしない。有木城の主郭部は、有木地区の八幡神社付近及び南西側付近とみられ、残存状況がやや不良ですが、３から４か所の郭とそれらを区切る堀で構成されている。さらに、南側の台地斜面部に郭が配されていたようです。主郭部周辺の虎口は、主郭部の南東側の低地からと西側の低地からの遺構が残っている。主郭部の北側には土塁が残存し、平坦面が続いていて館等の施設があったようです。

主郭部付近に建てられた神社

二階堂実綱氏の墓標と思われる十三石塔

蟻木城跡の土塁　その2
城郭を守る土塁や堀切の跡

蟻木城跡の土塁　その1
城郭を守る土塁跡や堀切跡

石川城（市原市石川）

石川城は、現在は「太平洋ゴルフ市原コース」になっているので遺構などは確認できないが、図面を見る限りではそれなりに城らしく見えてしまう。特に「１郭」と２郭との間に区画があり、堀切と土橋であるように見えます。１郭にも背後の切り崩した土塁による防御と前面の土塁と虎口状地形などがあって、まさに「城」と言った地形などがある。

字名に「外曲輪（たぐるか）」や「長堀」、「横宿」と言う関連地名があるので城があったことは確かなようです。

城主などは明らかではないが、この地域における北条氏方の有力な支城であったようですが、伝承によると天正１８年に豊臣方の攻撃によって攻められ落城したという。

磯ヶ谷城（市原市磯ヶ谷字塙台・城出下）

磯ヶ谷の八幡神社の東側一帯に「台」「城出の下」「後馬場」「宿」と言った地名が残っており、中世城館の存在したことを感じさせます。しかしながら、周囲は宅地化されており、どこが城跡かは不明です。しかしながら「宿」の付近には低い土塁の存在が見られる。また、県道沿いには明らかにかつての土塁跡と思われるものが南北にのびて現存しているが、この土塁の規模からすると、城と言ってもそれほど大きなものではなかったと思われます。

磯ヶ谷城は、武士城の南西１km の所に在り、新堀城ともよく似たつくりで、沼沢地帯の中の台地を利用して築かれています。

城の歴史については、新堀城や武士城などと同様に、佐是城の支城網の一つとして武田氏関係の人物によって築かれたものと思われますが、地元の土豪層の居館ではないかという説もある。

磯ヶ谷の八幡神社

県道沿いに現存する土塁跡

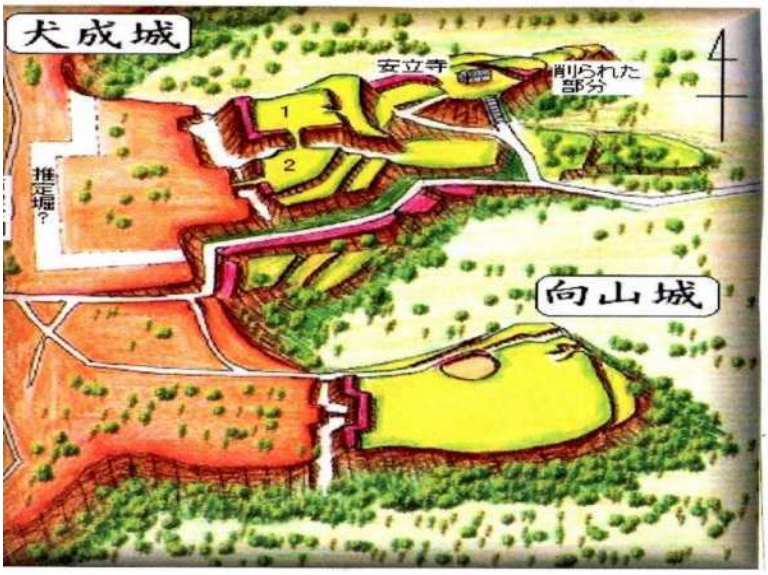
飯沼城（市原市飯沼）

飯沼地域にある聖徳太子堂

飯沼の集落の中の細い路地を進むと、聖徳太子堂や龍昌寺と言う寺院があるが、この辺が飯沼城の跡と思われる。
平地の居館で、周囲には養老川や前川があり、周辺はかつては沼沢地であったと思われる。その中に、土塁の一部らしいものも見受けられる。城主に在っては不明です。聖徳太子堂には、伝説によると聖徳太子が自作したと伝えられる仏像が祀られているが、本当に聖徳太子の作なのかは不明です。

犬成城（市原市犬成湯式倉）

犬成城の歴史ははっきりしていないが、築城の形式から推測をすると戦国期の後半期の城郭でないかと思われます。つまり元亀・天正年間の頃のものと思われますが、里見氏と北条氏の対立的な中での城郭の位置づけと思われますこのような状況で、この城郭は小規模でありながら、重厚で技巧的な構造を持っているという点では十分に注目に値します。そして、この城が市原から茂原に抜ける最短のルートに位置していることに注目し「北条氏の東上総侵攻」に関連した中継の為の城としてのものではないかと思われます。
城跡は安立寺の西側の台地にあった思われる明確に城郭遺構として認められるのは、南北に並んだ二つの郭です。１郭は長軸４０ｍほどの広さがであり、それほど大きなものではない。台地続きの西側と２郭側とに堀を入れ、土塁を高く盛り上げて分断をしている。西側の土塁は郭内からでも３ｍ以上の高さをほこっている。堀切は台地基部との間では７ｍほどの深さがある。また、東南部では東の台地下に向かって堀底が下がっているので、先端付近ではかなり深いものとなっている。この１郭と堀を隔てた南側ひと回り小さな２郭がある。この郭も同様に台地基部との間に堀切と土塁を配置しているが、１郭より小さいものから、馬出し的な機能を担っているものと思われる。
犬成城の南側には、向山城があったと思われますが、向山城は何らかの理由で急造されたが、完成を見ずに終わった城のようです。向山と言う地名は、明らかに犬成城の向かいと言うことを意識して付けられた名前ですが、犬成城の「向かい」と言うのが敵が取り立てて付けたものか、犬成城を支援するための城なのかを断定する資料はないが、後者のほうが正解とみても良いのではないかと思われる。



安立寺に続く石段

１郭の土塁・３～４ｍ程ある

池和田城　（市原市池和田字城廻）

池和田城は、里見義弘の家臣多賀越中守の居城でした。天神社のある付近に本丸のあったと思われる。それらを中心に多数の郭が取り巻いていたようだ。「関ハ州古戦録」などの軍記にも「池和田の戦い」が載っているが、それによると、「永禄７年（１５６４年)、国府台合戦での勝利の勢いを持って北条氏政の率いる一万の軍勢が、上総侵攻の為にここに押し寄せた」という話が載っています。城は、なかなかの要害で堅固に籠城していたが、城内に内応者が現れて城中に放火されて、それをきっかけに落城したと言われています。城跡からは、焼け米や人骨が発掘されています。

鳥瞰図は、南西上空から見たもので、本丸は城内最高所で切り通しの道を上がり、井戸の脇を通ると１郭に到着する。

井戸は現在も湧き出ております。一郭の先端部には天神社が祀られており、その背後には土塁や土橋のような出っ張りが残っています。一郭の下側には二郭と三郭があり、二郭の端には見張り台として築かれた櫓台がある。池和田城は、比高差は少ないが段々の腰曲輪に、横堀、尾根上の枡形や堀など様々な工夫がなされており、戦国期の技巧的な城であったようです。一郭の方だけ見るとほとんどがこの郭だけの小さな城と見えますが、周囲をよく見ると全体的にバランスを考えて防御の要が出来ている城であることが分かる。

池和田城を西方から見た写真

台地基部の切通し部分

１郭跡にある天神社、後に土塁

「あ」の部分の櫓台跡

城中には多くの櫓台があった

「い」の枡形の土塁跡

市原城（市原市市原字要ケ谷）

市原城は、白船城・能満城と兄弟城と言われています。城主に在っては、薬師堂の縁起に「古城市原領主曽我の稲月末葉上総之介光重の一子曽我之上総之介光善が御建立」と記されていますが、他説にも里見氏に従った武将に「市原の忍丹波守舎弟民部少」という説も伝えられています。

国道２９７号線の山木交差点から南に５００ｍほどに在り、比高１０ｍほどの台地上にありました。周辺は宅地化により遺構の大部分は破壊されていますが、光善寺のある所が一部段高く郭のような跡を残しており、周囲に土塁を巡らされ、その外側は切り落としたような土手に成っています。

台地は北側に向かって東西２つの舌状部分があり、そのうちより広大な北東部分が台地先端部に当たり「要谷（ようがい）の地名も残っています。ここが城の中心部分であったようだ。先端部には櫓台状の高まりがあり、土塁状の削り残しが光善寺の辺りまでが主要部であったと思われます。それに対して北西部の台地先端部は出城のような形状で、近年まで土塁は残されていたようであり、西側には虎口と思われる構造が見られます。ここから続く西側にには、堀跡と思われる沼沢地があり古代の道路も付近を通っていた。台地北側の中央部も谷戸状になっており、ここに現在の県道２９７号線が通っています。市原城は、街道を取り込む形態の城郭であったようです。南側の谷津を挟んだ台地には、「花輪台」「竹の内」といった地名が残されており、この部分には出城や居館が存在していた可能性があるが、どのようなものかは不明です。このように市原城は、構造については不明確ですが、かなりの大規模な城郭であったと思われ、この地域を支配するための主要な城郭であったと思われます。

室町時代の石燈篭（市原市指定文化財）

土塁の跡と思われます台地

城主と思われる忍丹波守の居城跡の碑

牛久城（市原市牛久字大塚）

牛久城は、南総支所のすぐ南側にある比高１０ｍほどの広い台地にあったと言われていますが、他の説ではこの地から８００ｍ北西にある「市原高校」が立っている台地上がそうだとも言われています。どちらが牛久城跡なのかは判明していない。確かに養老川を望む川底から比高３０ｍほどの要害の地にあり、北側には現在の国道２９７号が通っており、水陸の交通の要衝を押さえることが出来る位置にある。さらに、周辺には根古屋集落を営むのにふさわしい地形があり、そういった意味では城を築くのにはふさわしい場所と思われます。台地上は広い畑になっている。長軸１００ｍほどあると思われる。台地の西側は自然地形でだらだらと降っているが、その北側部分にＣの櫓台がある。さらにその北側には土塁が続いており、これは盛り上げたものではなく、削り残したものと思われる。

北側が城の入口ということになりますが、ことらは腰曲輪が置かれていて、これが前面の防御の要と言うことになる。ただし、虎口遺構のようなものは見られないが、畑の造作時に改変されてしまったと思われます。この腰曲輪に面する１郭の北端部分と、腰曲輪の北端部分とにはそれぞれ櫓台形状の高まりABがあるので目立っている。特に腰曲輪の先のＡは、その先の低地に張り出しているので、自然と横矢張り出し形状に成っている。この２つの櫓台ですが、いかにも円墳状の形状といい、櫓台そのものが台地縁に置かれていないことから、本来は古墳であったものと思われます。それを櫓台として利用したものと思われます。Ａの腰曲輪の下は地形がくぼんでいて、堀の名ごりと思われる。牛久城は、本来あったと思われる地形をうまく取り込んだ城ですが、周辺の切岸加工は甘い部分も多く、そういう意味ではそれほど手をかけていない城のようで、臨時あるいは簡素な城であったと思われる。

養老川の上に築かれていた牛久城

城跡と思われる台地

櫓台の建てられていた古墳跡

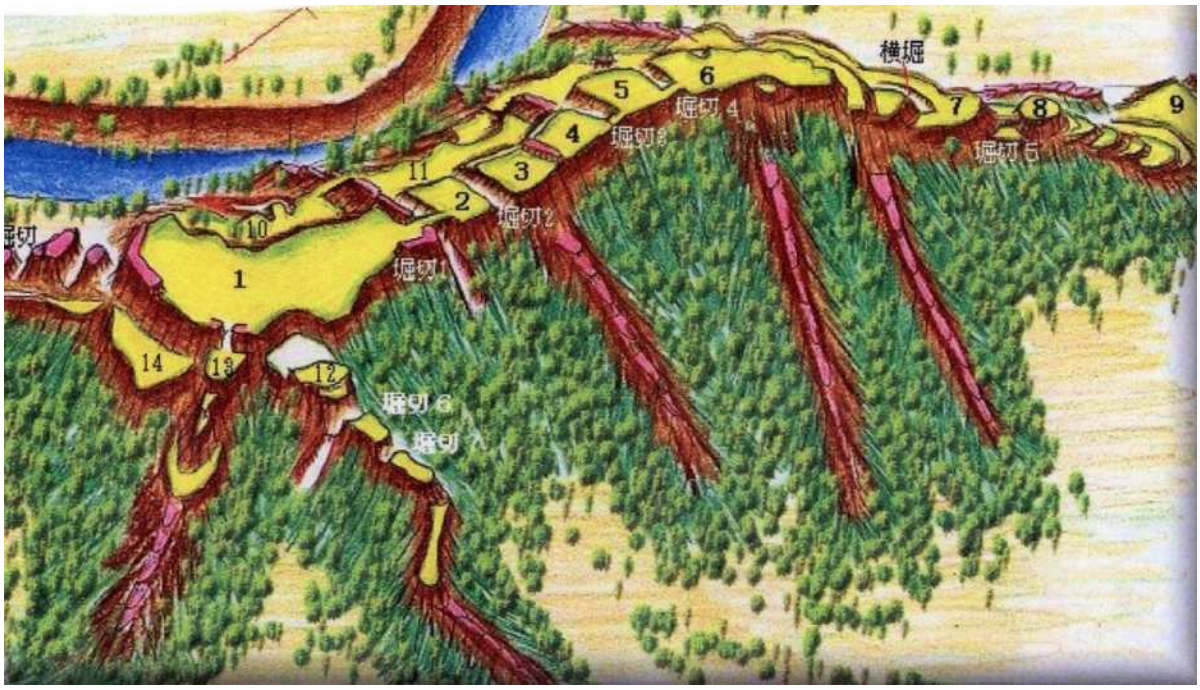
土塁のあったと思われる場所

大羽根城（市原市本郷字大羽根）

大羽根城は音羽根城とも言われ、高滝湖に注ぐ養老川のすぐ東側にそびえている比高６０ｍほどの台地上にある。高滝湖にかかる境橋からは南に８００ｍほど、大羽根橋からはすぐ正面東側に見える山が究極の要害地に建っていた城と思われます。大羽根の歴史や城主は不明ですが、地元の言い伝えでは天正年間に里見氏が千葉氏の攻撃の備えて築いた城であるとのこと。城の規模や構造からして、天正期の里見の城と言うのは正しいと思われます。高滝湖の側には里見地区があり、「里見駅」や「里見小学校」など里見氏に関する伝承がこの地域には息づいて居ます。

大羽根城は、基本的に細長い尾根を蓮郭式に区画した構造で、一番面白いのが南側の台地基部との間の細尾根部分に置かれた連続堀切です。この堀切は４～６ｍほどの間隔で置かれているので、側面から見るといくつかもの塚が並んでいるように見えます。「ラクダのコブ状阻塁」のような遺構ですが、大きな堀を作った方が守りやすいと思われるが、このようにしたのには何か意味があったのか。このような堀切は「峯上城の７つの堀切と似ています。連続の堀切の底から高さ８ｍほどの城塁の上に１郭があります。８０ｍｘ２０ｍほどの湾曲した郭です。南側には、高さ２ｍほどのかなりしっかりとした削り残しの土塁が置かれている。西下には１０の腰曲輪があり、ここには２本の連続した堅堀が見られます。この堅堀は直下で合流して一本に成っている。この下に湧水を溜めておく施設があった。下の家で利用しているようです。また、東の下には２本の尾根があるが、このうち１３の所から１郭に上る虎口状の窪みがあります。また１３の窪みから下には峰が下がって、やや広い郭に出るだけで、導入路は見られない。一方隣の１２の郭から先は堀切が２本あり、段差のある城塁も続いており、こちら側からの導入が配慮されていたように思われます。すなわち、１２の所から１３の所へ導き、そして虎口に上がるという通路が想定されていたと思われます。１郭の北側には、土塁と土橋による虎口が見られる。この先からは２０ｍ四方程度の小郭が連続してｒ配列されており、その間には堀切が掘られている。但し、３と４の郭との間にある土塁は高さ１ｍ程度の低いものであり、この２つの郭は合わせて１つの郭と見る方が正しいとも思える。堀切は、段々規模が小さくなり、堀切４に至っては現状で深さ１ｍ、幅３ｍほどしかありません。６の郭から先は、北側の先端に向かって地勢が段々と低くなっている。７の郭の所には、Ｕ字型の堀切の跡が見られますが、かなり埋まっております。８の郭は、物見台のように独立して高くなっているような形態であった。ここから、段々となっている部分を降りてゆくと、１００ｍほどのかなり広い９郭に出るが、ここは後世に耕作地として開かれた所と思われる。以前に郭があったとするならば、根古屋を置くのにはふさわしい場所と思われます。

大羽根城のラフ図



養老川沿いから大羽根城跡を見る
西側に架かる大羽根橋より撮影

１郭南側の土塁跡。削り残しによるもので、櫓台が建っていたと思われます。

堀切１，深さ６ｍ・幅８ｍほどある。
左側の１郭がわには土塁と櫓台があった。

連続の堀切。右側が１郭の土塁で、ここから左側にこぶ状に並んで尾根がある。

大宮部田城（市原市池和田字大宮）

大宮部田城は、池和田城の北西７００ｍの所にある比高３０ｍほどの台地上にあった。小港鉄道の「上総鶴舞駅」のすぐ目の前にある台地です。この台地には現在「大宮神社」が建てられており、この上が城址に成っています。登城口はよく分からないが、城址には虎口や櫓台などが残っている。
城の歴史については明らかではないが、池和田城に近い処にあることから出城の可能性が高い。

大宮田城跡の前に建つ大宮神社

奥野城（市原市奥野）

奥野城は、奥野公民館のある尾根の北側を登っていった所に城址があります。山頂には、それほど大きなスペースはないが、尾根を削平した２の郭が細長く伸びています。その南側の一段高くなっている部分が城内最高所の平場で、ここが１郭のあったと思われる。頂上部を削平することで、長軸３０ｍほどの平場を構成しています。その東南方向が尾根続きになるが、尾根との間には深さ６ｍほどの切岸がある。堀切には成っていないが、明確な分断意図を見て取ることが出来る
構造物です。１郭から２郭にかけての東側は、断崖のような急斜面となっているので、こちらから攻めるのは難しいと思われます。２郭から西側にかけては、３・４といった腰曲輪が２段あり、その先には、ほぼ自然地形の尾根がのびている。その先端の下にはＢの堀切がある。Ｂの下側には、２か所の墓地がありますが、南側の墓地の下の畑となっている平場までが城域であったと思われます。２郭の北側には櫓台状の土壇によって守られています。その先にも切岸が形成されているが、ことらにも堀切は存在しない。２郭の西側の斜面は、自然地形の傾斜地ですが、ここまでは手が回らなかったようで、未完成の城の可能性もある。
興味深いのは、４のある尾根と５のある尾根との間の谷戸部分に、Ｃの切り通しが入れられていることで、これは一見すると虎口のようなものが見えます。その両側上に郭が存在しているので、虎口に迫る敵を攻撃するには格好の場所であり、技巧的な構造物といった見方もできる。実際、この城には虎口が存在しないので、これが城の虎口であったと思われますが確証はありません。このように奥野城は簡素な造りの小規模な城郭で、尾根を削平して平場を造成して造った山城と思われます。

南西の国道から見た奥野城址

Ｃの切り通し道。虎口とも思われる

２から１郭の城塁を見た所

Ｃの切り通し道。虎口とも思われる

大桶城（市原市大桶字城廻・城跡山）

大桶城は、葉木城の３Km ほど南にあり、葉木城から「うぐいすライン」を南下してゆくと、城址の麓に到着する。城址は大きく２つの峰に分かれていて、その両方に城があったと言われていますが、城址山の方は城と見るのには問題がある。

城廻り山の山頂は長軸４０ｍほどの単郭の郭に成っている。台地基部の側には２ｍ余りの堀切があり、その堀切は北側から西側にかけて、帯曲輪となって巡っている。その帯曲輪は１郭の城塁を切岸加工した際に生じたものであると思われる。防御の基本はこの単郭だけでの城であり、堀切の東西側は自然地形のままでした。堀切は南側では下に落ちて行き、横堀と接続するが、堀切といっても実際は小道のようなもので、幅も狭く深さもあまりないので通路のようなものと考えられる。

この道は、台地基部側に伸びており、堀切を形成している。また、西側には緩やかな傾斜をしていき南西側の下で、テラス的な空間を造り出しています。この先の堀は堅堀となっていき、山麓を一直線に伸びている。こうした形状からして、この堅堀や横堀は途城用の通路として用いられていたものと思われる。遺構はこれだけであるので、大桶城は極めて単純で小規模の城館と思われ、簡単な砦か詰め城と言った性格のものと思われます。

一方、谷戸部を挟んで北側には城跡山があります。甘露寺の奥から一直線に山頂に上る石段が付けられており、山頂には「軍茶利四天王」を祀る社殿が鎮座しています。この部分は削平地となっていますが、土塁や切岸などの加工はなく、これだけで城と呼べるかは分からない。しかし、背後に５０ｍほど進んだ所には２ｍほどの堀切状の部分が見えるが、通路として使われていたとも思われます。しかし、山そのものを「城跡山」と呼んでいるということは城があったと考えても良いと思う。但し、２つの城の間には谷戸部が入りこんでおり、両城の間では連携が非常に悪いので、関連をもった城郭として見るのは難しいと思われます。時期の異なる城であったか、別々の機能をもって築かれたものであるかは不明です。

大桶城１郭東側の２ｍ程度の堀切

横堀の底は西側で広くなり、堅堀に出来ている

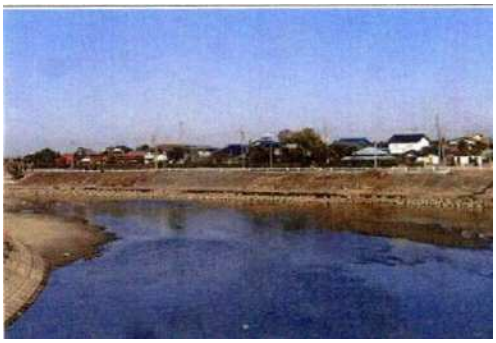
北の城跡城の尾根基部側にある堀切

城跡山にある「軍茶利四天王」の社殿

大坪城（市原市大坪字坪内）

養老川を望む大坪の集落が、かつての大坪城の跡です。しかし、現在では集落内部は宅地が立て込んでおり、明確な遺構は見られません。集落の中心部にある福楽寺は、城との関連があった寺院と思われます。この寺院は、城主であった大坪氏の菩提寺であったという伝承がある。詳細な歴史は不明ですが、大坪慶秀と言う者が城主であったという伝承があるが、この人物についての詳しいことは不明です。

このような現状ですが、養老川を臨む地形と、集落の周囲が水田地帯であったと想像すると、かつては沼沢地であったことからここはかなりの要害地形であったようで、城を築くにはふさわしい場所であったようです。また、養老川の水運を監視するのには便利な場所でした。集落の周辺部を見ていくと、水田地帯より若干高くなって土手が見られます。これがかつての城塁の名ごり思われる。また、その下を通っている水路が、水堀を改変したものと思われる。現状では城跡そのものが集落化してしまっているが、集落そのものを取り囲むような城郭であったと思われます。



養老川越に、城址方向を遠望

北側の堀跡と思われる部分

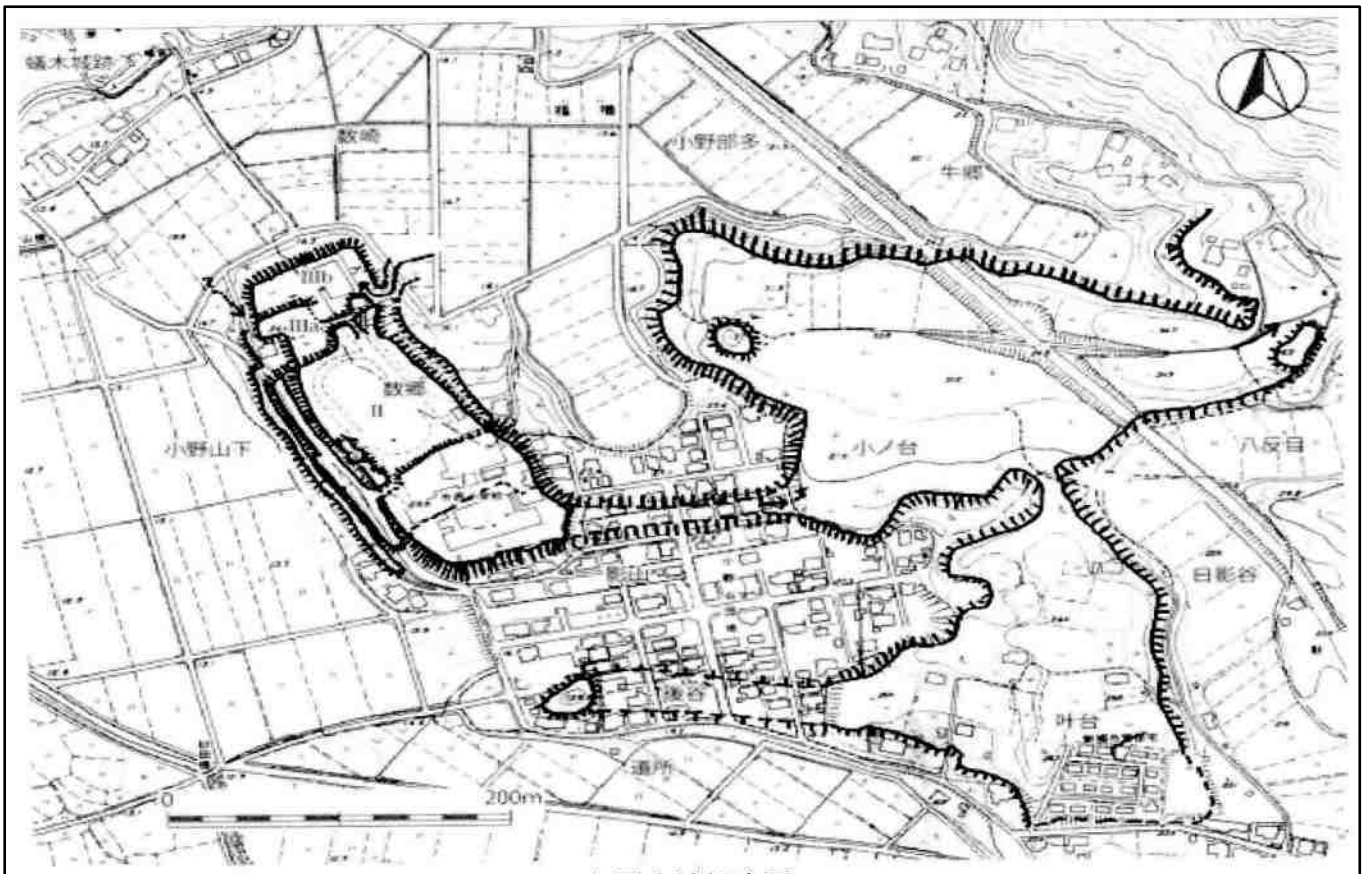
押沼城（市原市押沼）

押沼城は、押沼神社の北側一帯にあったという。神社の辺りから北側にはいった所の周囲には土手が見られますが、この辺りを「城の内」と呼ばれていて、土気酒井家の家臣であった三橋家の城館と思われる。１郭は神社の付近にあったと思われます。県道脇には土塁を伴った２軒の民家がある。ここも３の鞍部を挟んで、やや高い地形がある。蓮郭式に３郭ほどが並んだ形式と思われる。周囲は宅地化などで改変されているようで、本来の形状は全く判明しませんが、土豪層の居館とも思われます。神社のある土地は台地上にあるが、神社はさらに下の道から１０ｍほど上がった所に建っています。城の内よりも神社の方が地勢が高くなっているのは不思議ですが、神社の周辺には土塁が残っているが、神社に伴うも

のと思われる。

小野山城（市原市海士有木字小野山）

小野山城は、養老川の沖積平野に突き出した比高２０ｍほどの独立台地上にあつたが、現在は市西小学校が建っており、その建設により遺構などは失われています。有木城の９００ｍ東南に在り、有木城の支城だと思われる。「上総街村誌」によると、ここは北条氏方の城で、「小野修理亮」という者が守っていたが、小田原の役に際して豊臣方の浅野長吉に攻められて落城したという。城址はほぼ独立形状の台地であり、かなり広い空間があり、海士有木方面から見据える位置にあることから、地形的にみても城を建てるのには良い場所と思われます。現在小学校の校舎とグラウンドがある場所が主郭、北側の一段低い所が２郭、１郭の南側に腰曲輪のような構造に思えます。戦前までは小学校に城の縄張り図が残されていたという話が残っており、城であった言い伝えやそれらしい地形から、実際に城があったことは間違いないと思います。



小野山城概念図

有木城跡から見た小野山城跡

風戸城（市原市風戸字宮の下、腰巻）

風戸城は、中高根下ノ根館の５００ｍ西の比高３０ｍほどの高台上にあったと言われます。台地の中腹には日光寺や熊野神社があり、観音堂には県指定史跡の木造聖観音立像が祀られています。城址は、一部山林やゴルフ場に成っていますが、空堀などが残っています。城主は未詳ですが、上高根城や高坂城と同様に、佐是城の支城で武田氏関連の城であったと思われます。日光寺や観音堂、熊野神社はみな、谷戸部内の小郭のような地形に存在しており、北側の広大な台地と南側のＢの尾根とによって囲まれた谷戸式城館とでもいうようなものと思われます。谷戸部の高台は、谷戸内部を掌握するのに最適な場所であり、そういう所に地方小領主の居館が置かれているということは上総地域にはよく見られる。そして、Ｂ の部分はわりと平坦になっており、ある程度削平されたような跡があり、その先端がやや切岸状になり、その先は自然に尾根が傾斜していく地形となっている。したがって、Ｂ の部分は尾根上の郭として意識されていた空間と思われます。しかし空堀などは見られないが、Ａ の切り通しと接する Ｂ の尾根の部分が若干土塁状の高まりとなっており、これが本来あった堀とセットになっていたものとも思われますが、空堀自体がなかったことも考えられる。

風戸と隣接する西側を「立野」いう。「立野」あるいは「館野」の転訛である可能性があり、実際立野には「大堀切」「木戸脇」といった関連地名も存在するという。あるいは、隣接する「館野」と、風戸城とが関連しているかとも思われますが、きちんとした確認をしてはいない。これが本当に城館であったかは確かではないが、もし城であったとすれば上総に多い谷戸式城館の一つとも考えられる。

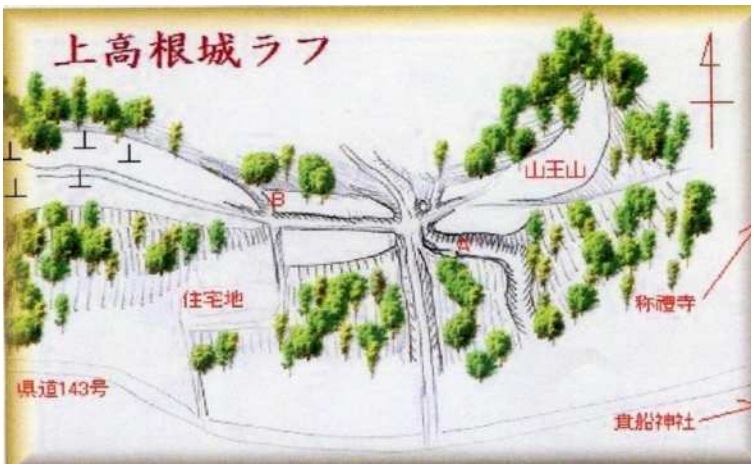
Ｂ の尾根から見た谷戸部。駐車場の先に日光寺と観音堂が見える

Ａの切り通しがある。空堀とも思われる

上高根城（市原市上高根字馬場台、殿ノ下、上本郷、下本郷）

上高根城は、小湊鉄道馬立駅の北西１．２ｋｍほどの位置にあつた。県道１４３号線の弥禮寺を過ぎて５００ｍほどの新興住宅街から北側に入り、右手の山に入った所が城址です。山林化されているため遺構はつかみにくいが、城址の入口付近に再規模な空堀があり、比較的規模の大きい城址であるかとが分かる。空堀は幅、深さともに６～７ｍあり、台地の基部と城址を分断し、城址を取り巻くように掘られている。腰曲輪の何段にもわたって

築かれています。この城址の部分は「山王山」と呼ばれているが、郭はその周囲にも展開していたとも思われる。城主など歴史については未詳ですが、佐是城の支城の一つで、武田氏に属した城と思われます。

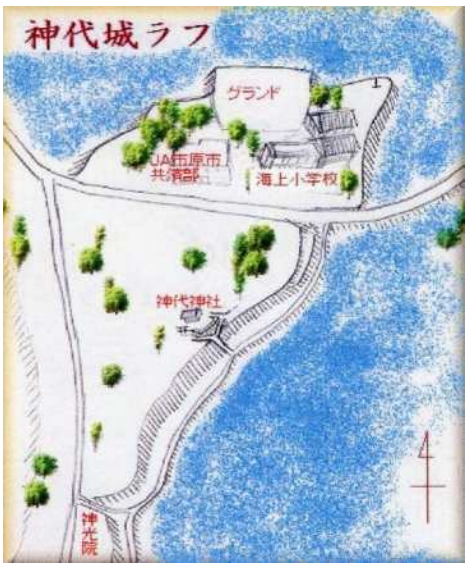


城址の周りにある堀については、深さや規模は城の守りの為のものと言っても差支えないものと思われましたが、堀の巡らされている形状が、尾根筋を掘り切っていたものでなく、郭を防御する横堀となっているものでなく、しいていえば「尾根に上がるために切り通し道と言った方が良いと思われる。堀と思われた切り通し道を冷静に観察すると、堀でないことが分かり、ここがほんとに城址ではないのかと思われます。しかし、中世的な城館の存在が全くないとと言うわけではない。称禮寺の下を「滝の下（館の下の転訛）」といい、南側を「馬場台」という。また付近には上本郷、下本郷と言った城下集落を想像させる地名があり、さらに東側下の糺神社（あざな）下の辺りを「殿の下」と言う関連地名から、称禮寺辺りに中世の城館が存在していたことはほぼ間違いないと言えます。称禮寺には古い五輪塔も残っており、これらも館の存在確立を高めていると思われます。具体的にどこが城館の場所に当たるかは不明ですが、称禮寺のある場所がそのように思われます。

A の所の堀切部分はいかにも堀のように見えるが、実際には切り通しの通路の跡と思われる

B の部分にある横堀状の部分は、通路跡であったと思われる

神代（かじろ）城　（市原市神代字殿屋敷、本郷、切遠）



神代城は、海上小学校や JA 海上支所、神代神社などのある台地が城跡と思われます。海上小学校のある台地は、水田地帯に突き出した比高６ｍほどの土手になっており、いかにも城塁のように見えます。小学校の施設の建設により遺構などはかなり破壊されている。地形的に見ると沼沢地に突き出た先端部はいかにも城塁のように見え、小学校のある部分が城の中心部であったと思われますが城塁部分を除いてはほとんど隠滅しています。しかし、虎口や土塁が残っているという資料があり、調査をしてみると東側の台地下から神代神社に上がる部分が、２つにわかれてさらに斜面を切遠し状に進んでゆくようになっており、これが虎口と思われる。さらに神社のある台地縁部には、微妙な土の高まりが見られこれが土塁

と思われるが、これを遺構とするならば、実質的には遺構は存在をしないのではないか。
このように、城内を散策しても「神代城」がどのような城であったかのかは判明しない。また、城内には「城の内」とか「要害」「御城」「中城」などと言った慣例地名は存在しないし、存在するのは「殿屋敷」という地名は存在するこれらを総合的に判断すると、屋敷であったとすれば、ごく小規模の館程度のものが、台地のどこかに建てられていたのではないかと思われ、地元領主の居館であったと推測でき、中世のものでなく近世段階のものの可能性がある。

海上小学校の北東先端の墓地の土手を見るといかにも城の土塁のように見える

神代神社の周囲には、土塁状の部分や虎口状の部分は後世の変革のように思える

海保城（市原市海保字公家の台）

海保城は、海保霊園の北５００ｍの所にある比高１５～２０ｍの台地にあった。台地の下には森巌寺、その南の郭内には学道寺という寺院があります。学道寺から郭内に向かう途中には古い墓石群があり、その周囲には土塁が残っています。そして、郭はほとんど畑地に成っている。城址であると言うが、台地上は広大なだけで、特に城郭らしい遺構を見ることが出来ない。「公家台」という地名があり、高貴な人の居館があったのではないかと思われますが，ほかには城郭関連の地名などは存在しない。
海保城の歴史は古く、平安時代に「源頼光」が居城していたという。その後に「海保頭三位中納言盛直」が城主となっていたが、長徳２年（９９６年）に源頼信との戦いで敗れたという。後、鎌倉時代になると「海上与一常衛」が城を構えた。「海上常衛」は、銚子の中島城の城主ですが、この地にも領地をもち城を構えたと言われています。

学道寺の石段を上がってゆくと広大な公家台という台地が城址と言われています。

寺院の背後にある墓石群。城主と何らかの関係があると思われる。

吉沢城（きっさわ）（市原市吉沢字吉沢岱）

吉沢城は、吉沢地区の中心部、小草畑川ともう一つの支流が合流する地点の南側にそびえる比高５０ｍほどの独立台地上に築かれていた。城山の下には、国指定の重要文化財である「鳳来寺阿弥陀堂」が建っている。この「鳳来寺阿弥陀堂」は、室町時代後期の作で、平蔵城の城主土橋平蔵が建立したものと言われている。集落の奥野道を上がってゆくと、墓地の脇のトンネルを抜けてゆくと堀１があり、ここを経由して城内に入ることが出来る。ここを登った所が４の郭で、尾根上を削平した郭で、南北に細長いものです。そこを南下して行くと堀の２の所に出るが、この堀はもともと自然地形として出来たもので、それに面する部分を切岸加工によって堀切状にしたものと思われます。この堀を越えて行くと３の郭があり、南北に長く削平もきちんとされていない。３の郭の南側端の城塁の中央部には切り通し状の窪みがあり、その先に堀３がある。この堀は深さ６ｍほどあるもの。この先の１郭辺りが城内で最も削平がきちんと行われている場所で、ここに主郭部があったと思われます。内部は高さ１～２ｍほどの段差で数段に分かれており、西側には腰曲輪なども配置がされている。１郭の北側には２郭があり、この先は１０ｍほどの城塁ががあり、この辺りからかなり広い平坦地が下に向かって何段も配置されている。このように吉沢城は、細尾根を加工して郭を造成して築かれた城であり、山上にはそれほど多くの人員を配置することが出来なかったと思われる。伝承によるとこの城も平蔵城の城主の土橋平蔵であったと言われ、現在見られる遺構の規模は戦国期のものであると思われますが、粘土質の岩盤を大胆に掘り切るという構造は、千本城や峰上城などと相通ずるもので、里見氏・正木氏の関連があったと思われる。

国の重要文化財鳳来寺阿弥陀堂

城址に通じるトンネル

岩盤を１０ｍほど掘った１の堀

君塚城（市原市君塚）

君塚城は、八幡御所の１Km 西南、岩野見城から１Km 北にある住宅地の真ん中に明光院や稲荷神社のある付近に城址があったと思われます。この辺は平地ですが、市街地化してしまい遺構は見られませんが、平地の居館と思われます。城主などは不明です。

君塚城址と思われる場所に立つ明光院

草刈城（市原市草刈）

草刈城は、京成電鉄のちはら台駅のすぐ南の地点にあったと思われますが、駅施設の造成のために地形は変貌しています。村田川に臨む比高１０ｍほどの南西部に突き出した台地の北西部には谷戸が入り込んでおり、先端部は半ば独立形状を示している。さらに台地続きの北東部には、一段低い帯状の水田が見えている。これがおそらく、台地基部とを切断する堀だったと思われる。郭内部のほとんどは畑地となっていますが、その規模は１００ｍｘ２００ｍほどと広大です。単なる豪族の居館以上の規模を有しており、かなりの大人数を収容することも出来るだけのスペースがある。戦時の砦のようなものであったと思われます。城主や歴史については不明です。

小草畑城（市原市小草畑字結城沢）

小草畑城は、金光寺の南５００ｍ、鳳琳保育園のすぐ東南側に見える比高３０ｍほどの山上にあったと思われる。周囲を削られたような崖によって囲まれた山です。山の南側に谷戸部が入り込んでいて、そこを「結城沢」と呼んでいる。その地名がここが城跡とわれる根拠と思われます。しかしながら、地元の方に城館が存在をしていたのかを尋ねた所、そのような話はないが、かつてはこの山には銀坑があり、その周囲には削られたような穴が多く見られますので、結城沢は銀坑の為の加工施設やそれに纏わる人が多く住んでいた集落の跡である可能性が高い。その鉱山を守る為の防御的な要素も存在したとするなら、一種の城館と言っても良いと思われます。

小草畑城があったと思われる結城沢には、銀坑と思われる横穴が多数見られる

古敷谷大代城（市原市古敷谷字立山）

古敷谷大代城は、大羽根城の東南１・４ｋｍの所にある。県道加茂長南線を里見小学校の辺りから、長南方面に向かって行くとこの辺が大代と言う地名で、「富士カントリー倶楽部」と「森永高滝カントリー倶楽部」などのゴルフ場があり、城址の一部は「森永高滝カントリー倶楽部」と成ってしまっている。湯原観音のある辺りから西の山際に入った左手の台地が城址と言われています。城址には、土塁や虎口が残っていると言われている。また、この台地一帯には「木戸脇」と言う地名も残っており、かつては門が存在していてそれが城館に伴うものと思われます。参考資料とし

て、この台地には「箕輪」姓の家が６件ほどありますが、「箕輪」も城郭関連の地名でありますが、地名ではなく姓なのでこの場合は、関連地名とは言い難い。
古敷谷大代城の北西１．４ｋｍほどの所にある大羽根城があり、当城は尾根伝いで接続をしており、本来は大羽根城の出城のような性格を持った城と思われます。尾根との間には谷津を利用して堀切を設定していたようだ。

Ａの場所にある堀切状の切り通し

Ｂの場所の堀切状の部分

金剛地城（市原市金剛地字陣場）

金剛地城は、茂原市との境界に近くにあります。千葉外房道路の板倉インターの南１．５ｋｍの所にあり、比高２０ｍほどの独立台地で、北側には本宮寺や熊野神社があります。ここから大沢地区との境界付近のラジコンサーキット場までの南北１ｋｍ近い台地全体が城址と思われます。土塁や空堀、虎口などが残っていると言われているが確認は出来ていない。陣場台と言う地名からすると、城と言うよりは陣所であり、合戦の際に一時的に陣取っただけの場所であると考えると、遺構そのものがほとんどなかったということも仕方がないと思います。参考資料では「多賀氏」の陣所の跡であると記されています。また、伝承によると本納城城主黒熊大膳亮の出城の一つであったと思われる。土気城の酒井氏と黒熊氏（黒駒氏）とは敵対関係にあり、実際に合戦も行われていて酒井氏に備えて築いたものと言われていますが、黒熊氏は実在をしていたかは確認をされていないので、この伝承については信用性には欠けます。
台地の中ほどに熊野神社があり、その先の畑となっている平坦地や山林化されている広大な地域が城域ということになっているが、広く防衛的な設備もあまり見られず城址がどこかは不明です。また、このすぐ左手の急斜面を登ると本宮寺があり、この寺院には土塁や櫓台状の地形が見られるが、これは寺院に伴うものかも知れない。

佐是城（市原市佐是字武城・内郭）

佐是城は、養老川沿いの台地上に築かれた蓮郭式の城です。城そのものは平安時代に築かれていたようですが、現在のように成ったのは、天文年間に武田氏によってです。佐是城には、佐是氏を名乗る城主がおり、武田氏に属していた。天文２１年の椎津の戦いで佐是三郎国信は援軍として出撃して里見氏と戦ったが、敗れて討ち死にし、城も落城したと「武田系譜」に伝えられている。本丸は竹藪となってしまっているが、二の丸・三の丸は木が切られて整備されている。鳥瞰図は、東南上空から見たものですが、城は養老川に臨む比高２０ｍほどの川岸段丘上に築かれ、蓮郭式に３郭ほどが並んでいる。しかし、１郭と２郭との間の堀を除いて土塁は崩され堀は埋められているので、旧状は把握できない。かた、１郭の南側の妙性院の周井には方形に低い土塁堀があったようであります。ここに居館があったと思われます。

廃寺となった妙性院の入口に城址碑が建っている。

１郭と２の間の堀切

妙性院境内から見た２郭方面
虎口付近に土塁が見える

椎津城・正法山砦（市原市椎津字城山、要害台、五霊台）

椎津城は、姉崎の八坂神社の背後の比高１５ｍほどの台地の先端部にあり、多くの資料が残されているが、中世姉ケ崎地域を代表する城郭であったが、現在は宅地化されてしまい、遺構はほとんどなくなってしまっているが、かろうじて北側先端の「城山」部分が残っている。「城山」地域に１郭は一応残されていますが、戦国末期まで使われた城としては、あまり目立たった遺構が見られない。郭が段々になっているだけで蟻、虎口も技巧的なものではないく、かつて拠点的な城郭であったことを想像出来るようなものがほとんどなくなっている。主郭北端に低い土塁に囲まれた１５ｍほどの区画があり、これを「枡形状遺構」と開設する人もいますが、かつてはここに神社が祀られていたということで、其の建物に伴うものであった可能性が高いと思われる。

１郭と腰曲輪群の南側には幅１５ｍほどの窪地があり、其の南側に畑になっている２郭がある。現状では最も戦

闘的な遺構と言えるのが１の堀であろうと思われます。しかしながら、かなり改変されている。この堀底は西側に延びて「西の腰曲輪」にそのまま接続をしています。この腰曲輪の端には土塁の残りらしいものが所々に見られます。また、その下には高さ１０ｍほどの断崖となっており、高さはそれほどではないが、かなりの要害な地形になっています。２の畑の南側に２の堀があったようだ。２の周囲が一段低くなっているのが、かつては堀があったことが想像出来ます。さらに、南側の五霊台の南端の台地基部にも、発掘調査により、かつて幅２４ｍにもわたる堀があったことは確認をされています。このように、椎津城は、北側に突き出した台地を直線蓮郭的に掘り切った城郭であったことが分かります。

この台地は途中から西側に向かって延びた部分があります。この場所が「要害台」「外郭」などと呼ばれていることから、この部分も城域内であり、出城的な要素を持ったものと思われるが、それらしい遺構はなくなっている。

また、椎津城の東側に向き合った台地先端部には、正法山城があったと思われます。確かに位置的には出城を置くにはふさわしい場所です。城の周囲を巡る切り通しの道路は一見して堀切の跡のように見えますし、切り通しに面した郭の先端部には土塁が盛られている。郭内もきちんと削平されています。このように、明らかに城のように思われますが、専門家の見解では「ここは城ではない」と言うことです。その理由は、以前に発掘調査をしたが遺物らしいものは出てきなかったとのこと。そして、もともとの幅は城の堀としては狭過ぎるので、山麓の鶴牧陣屋（現在の姉崎学校）に関連した施設が置かれていたのではないかとの見解。

城の北側下にある八坂神社。背後に見える台地が１郭跡となる

１郭内部にある城址を示す標柱

さて、椎津城の位置づけは、かつては海に近く姉崎の港にかなり近い位置にあり、港や沖を行く船を監視をする機能を有していた城であったと思われます。戦国中期以降、この地は里見氏と北条氏とが取りあって入るが、どちらの勢力にも、敵の領地に対する要衝であり、重要な拠点となっていた。

椎津城がいつ頃築かれたのかははっきりしていないが、椎津氏によって早くから築かれていたのではないかという説もありますが、資料などはない。また、天正年間に古河公方高基は、椎津要害を攻撃していますが、そのころまでには真里谷氏によって築かれたという説もある。しかし、天正期に入ると北条氏の勢力が下総から上総にかけて南下しており、この時期には椎津城も北条氏の支配下に置かれていたと思われる。

要害下から見た所。一段低くい腰曲輪

台地基部との間に高く積まれた土塁

市東城（市原市中野）

市東城は、中野の高台にあった。現在光徳寺の敷地になっており、入口に「光徳寺市東城跡」と書いた木の看板がある。実際に城館跡と思われますが遺構などは見られない。城内と思われるＡの部分の周囲には土塁と、鐘撞堂のある所が櫓台の跡と思われる。底から西側に延びる土塁などが見受けられ、その下に腰曲輪があり、急な崖となっているが、明確な城館遺構と言えるほどのものではない。しかし、かつては志藤郷と言われ、土地の豪族の城であったと思われます。土気の酒井氏は、もともとは中野城にいたと言われています。その中野城は千葉市中野町の中野城であると一般的に言われていますが、「酒井氏のいた中野というのが、市原市中野であるという」説もあるようであり、もしそれが真実であるならば、酒井氏に関連した城館がこの辺りにそんざいをしていた可能性があるとも言える。

余談になりますが、光徳寺には数百体にものぼる尊者像群が並べられています。最近配置されたものと思われます。

それにこの尊者像は、一つ一つの表情が実に良く出来ており、ポーズなども個性的でひとつとして同じものがなく、見ていても飽きないので、この像を見るだけでも光徳寺に行く価値があります。

櫓台の跡と言われている鐘撞堂

この数に圧倒される尊者像群

下矢田城（市原市下矢田）

下矢田城は、下矢田地区の南端、養老川の懸崖に面した辺りにあった。南の養老川とそれに注ぐ支流に囲まれた場所で、川が天然の堀となっている。城域の規模は、１００ｍｘ１５０ｍほどはあると思われます。しかし、明確な城郭遺構があるかは分からないが、北側先端部付近に堀と思われるようなものが見られる。城であるからには、東側の台地続きの部分に堀切などを入れべきですが、それらしいものは見られない。このような状況を見ると、本当に城があったかは不明ですが、城らしい地形が見えるので採用されたのかとも思われます。

白船城（市原市山木白船山）

白船城のあった白船山は、かつては沼地に浮かぶ独立台地で、遠くから見ると船のように見えたことから「白船山」と言う地名がついたと言われています。そこに文明年間（１４６９年～１４８７年）「市原備前守真常」と言う武将が居城していたという史実があります。そして、近くにある市原城の支城として能満城と共に築かれたものであると言われています。
文明３年（１４３１年）に起きた八幡合戦に上杉顕定方に加わり、千葉氏と戦ったという史実があります。
白船城は、比高１５ｍほどの台地に築かれており、何箇所かに切り通しの道が見られるが、堀切の跡と思われます。
台地上を堀切によって大きく３つの郭に分断され、その周囲には数段の腰曲輪を配置する構造になっている。しかしながら、宅地化の影響で城の縄張りをうかがえるものは残っていない。

２郭と３郭の間の堀切の跡と思われる遺構

第３次調査を行って、建物の遺構の確認風景

真ケ谷城（市原市真ケ谷字要害）

真ケ谷城は、この地の豪族であった三上氏の城と言われています。三上氏は、佐々木氏の一族であり、室町期には古河公方成氏に仕えたと言わる。その後、小弓公方にも仕えていたが、弘治元年３月、丸谷如閑（真里谷如鑑）に攻められて落城した。その後三上氏は北条氏を頼り、岩槻城の北条十郎に仕えた。
真ケ谷城は、上総牛久駅の東側２ｋｍにある真ケ谷の集落の背後にそびえる比高５０ｍの山上に築かれていた。主郭と言われるのは、図の１、２の２段構造の郭となっていた。この郭は、北側を大堀切で画し、この方向に土塁も持ち、側面には腰曲輪を配していた。郭の大きさはそれほど大きくはなかったようだ。それよりも、城の中心にあり、もっとも広いスペースを持った３の郭が、実質的な中心の郭であったと思われる。１・２の郭と３の郭とは、それぞれ独立性が高く、郭の重要性という点についてはそれぞれの役割を持っているようにも見える。１郭の北側は、大

堀切で明確に区画されている。さらにその先には４の郭があるが、そこを進んでゆくと進路が尾根上になり地勢が上がって、５の小郭に到着する。５の小郭は一辺６ｍ程しかないが、周囲に土塁を巡らせてさらにその先は堀切で区画されていて、その先の尾根に続いている。３の郭の尾根にも、堀切などは見られる。この城の１，２、３郭が畑地と成っていて割合と歩きやすいが、３の郭の南側は尾根になっており、藪が深く自然の地形に近いが、下の方には腰曲輪がしっかりと出来ている。また、この尾根の東下に「堀ノ内」「殿部田」と言った地名が残されており、古い時代の城館はこの方面に置かれていたと思われるが、その位置ははっきりしない。

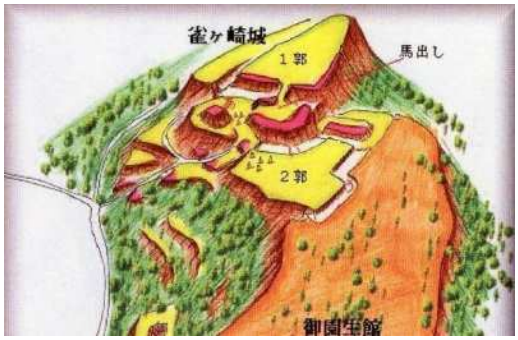
１郭と２郭の間の土塁

３郭の築かれていた台地で要害と言う字がついている

図のえの場所に虎口があったと思われます

太子堂がある高台が、以前居館があったと思われます。

雀ケ崎城（市原市藪字大牛）



雀ケ崎城は、台地の先端部が養老川に面した絶壁上にあり、かなりの要害の地です。また、近くにある御園生館は台地続きで両者の間には空堀がありますが、もともと関連のあった館であったと思われます。雀ケ崎城の方は、戦国期の遺構であり、この時代に大幅に改修されたと思われます。城先端部分は現在では削られて道路になっているが、遺構は山林の中に良く残っています。現在無住職となっている常徳寺のすぐ北側の比高２０ｍほどの台地の先端部で、１郭の馬出し付近や２郭は墓地と成っています。鳥瞰図は西側情報から見たものですが、先端が１郭でこの郭は台地の先端部が削られてしまっているので、もともとの半分以下の広さしかない。その手前には空堀があり、土橋で連結している。さらにその手前の部分は６ｍほどの小郭で、周囲には土塁が築かれており、馬出し郭となっているが、下の土壇がある間には堀がなく、段差があるだけです。この土壇は一見古墳のように見えるが櫓台に使われていたのかと思われる。この郭に上がるには、下から切り通しの虎口を何か所か通らなければならないようになっている。また、この部分右手には深さ６ｍ、幅８ｍほどの堀があります。この堀は１０ｍほどに進んだ所で下の堀底との間に段差を作っている。この段差の向こう側には土橋があって、そこも堀になっていてその先には段々に郭が続いていて、台地下に落ちて行く。このような状況を見ると、雀ケ崎城は実質的には１郭と馬出しだけの単郭の物見台であった城で、地方領主が居館を営むほどのスペースはなく、池和田城辺りの出城と思われます。

１郭の現状。両側に土塁がある

１郭の土橋脇の空堀

土壇のある郭に上る虎口

高倉城（市原市高倉）

高倉城は、高倉地区の中心近く、高田城から８００ｍ東南で、写真の白山神社の辺りにあったと思われます。白山神社のある高台は、下の道からの比高１０ｍほどあるが、遺構などは見当たらない。また、歴史なども未詳です。

高田城（市原市高田字南沢）

高田城は、市東城の東５００ｍ、比高２０ｍほどの平坦な台地に天正末期まで築かれていたという伝承があるが、現在は台地のほとんどが畑地になっており、遺構らしいものは見当たらない。高田城を築いたのは、北条氏の家臣で高田直勝であったという。戦国時代末期でその後、秀吉の小田原攻めの際には、豊臣方の真田氏らと戦い城は炎上し、城主も自刃したということが「市原郡誌」に記載されている。高田地区の中央南西側は広大な台地成っており、その中央北側辺りに産土大神が祀られており、この辺りを「寺の台」と言い、かつては寺院が建っていた。神社の入口の反対側辺りには「寺部田（てらべた）」と言う地名があり、神社から南側が一段高くなっている辺りが城址ではないかと思われますが、現在では木が植えられてすっかり変わっています。

高田城跡と言われている部分

高田城に続く部分の土手

鶴舞城（市原市鶴舞字北根来）

鶴舞城は比較的新しい城で、明治元年、徳川家達が駿河に入封するにあたって、浜松藩主井上正直はこの地に配置換えとなり、市原郡、埴生郡、長狭郡のうちの６万２千石の城として鶴舞城を築き始めたが、城が完成する前に「廃藩置県」と成ったために、城は鶴舞藩庁となった。現在城跡には鶴舞小学校が建っている。丘陵上に、二重土塁や空堀を巡らし、馬出しも設けたというが、現在では鶴舞城跡には様々な施設が建っていて、遺構の残存状態はよくないが、土塁の一部が残っていて「鶴舞城本丸の跡」と記された碑が建っていて、すぐ脇には井戸も残っています。鶴舞城としての明確な遺構が見られるのは、本丸跡の碑から南西方向に入り込んだ所にある水堀と土塁が現存していて「鶴舞城お堀」と言う案内看板が建っている。水堀は幅

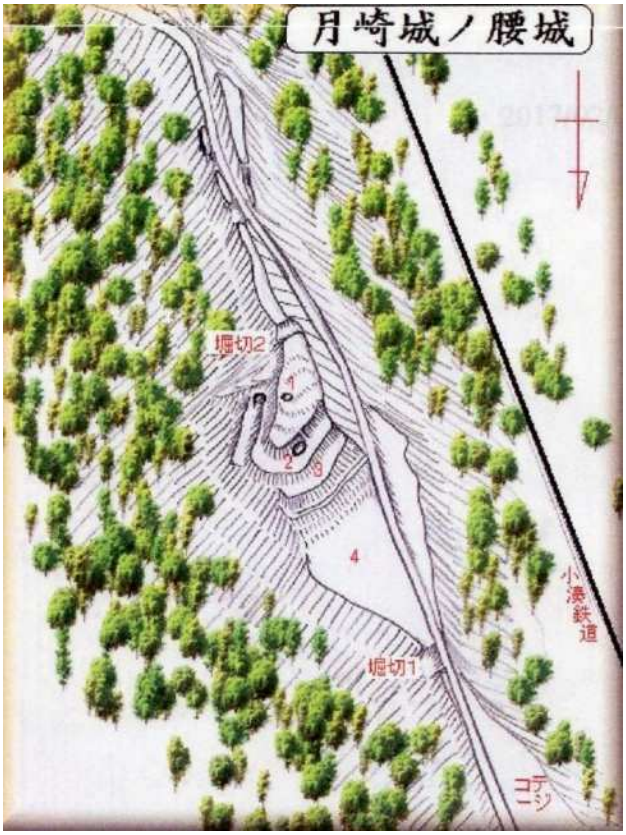
２０ｍほどある本格的なもので、６万石の大名にふさわしい規模のもので、本来はこのような堀を全周に回す予定だった戸思われる。

土塁上に立つ鶴舞城本丸之碑

南側にある幅２０ｍの水堀

水堀内部に残っている土塁

月崎城の腰城（市原市月崎）

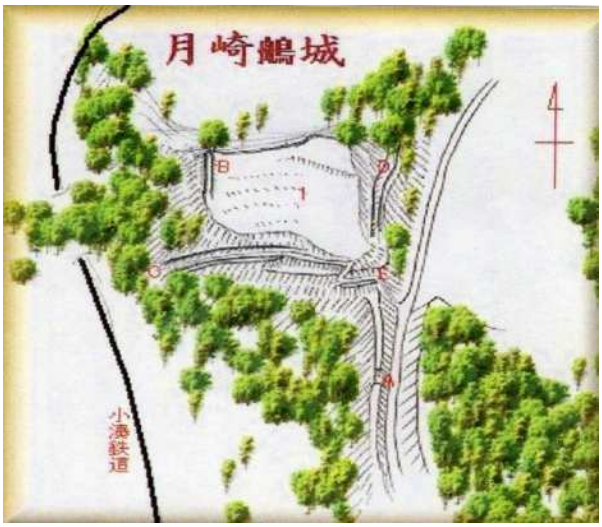


月崎腰城と月崎鵤（みさご）城は、琵琶首館の背後にある城址で、共に琵琶首館の詰め城または監視所として用いられたものと思われます。腰城は琵琶首館から３００ｍほど西側に築かれていている。郭や土塁、空堀なども残っている。
その北側には「鵤城」がある。この２つの城址は比高６０ｍほどの峻険な山上に築かれているが、山上付近の尾根沿いにはずっと道が続いているが、この道を「城の腰」と言い、これが月崎城の腰城と言う。城址付近には堀切１があり、細根部分を堀り切ったもので深さ４ｍ、幅７ｍほどのものですが、現在は埋められて道路になっている。その先の左側には割合広い平場で合ったようで、図での４の郭にあたる。さらに進んで行くと山の斜面に沿って付けられた道であり、下の４の郭からは６ｍほど高い位置にあるが上の腰曲輪からは４ｍほど低い位置である。この道の上には、３と２の二段の腰曲輪があり、土塁はさほどきちんと切岸形成されてはいないが、腰曲輪はそれぞれ幅５～６ｍほどできちんと削平された空間になっている。２ｍ円形の窪みがあり、井戸の跡と思われる。その後、同様の窪みが１郭内部やその東側下にもあったが、いくつかは後世になって掘られたものかも知れない。山頂部が１郭で南北に長く長軸４０ｍほどがあるが、きちんと削平されているとは言い難いことから、それほど重要な城ではないと思われます。このように月崎城の腰城は、シンプルな構造の城で、削平や土塁加工などの甘さからすると急造された城で、中央を通っている道が昔の街道であったとすれば、この道を押さえる為の番所機能と思われます。

キャンプ場の南側にある堀切り

１郭の南側にある堀切り２

月崎鵤（ミサゴ）城（市原市月崎字みさご台）



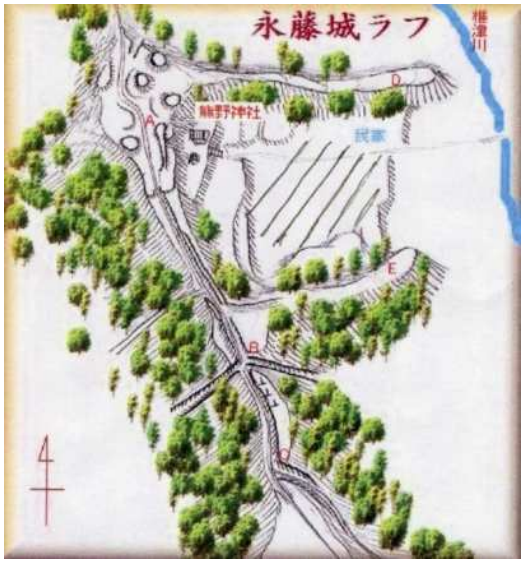
月崎鵤城は、月崎城腰城の北側の月崎方面に進んで行くと、道路の脇に A の堀切状の地形が見えてくる。その少し北側の山塊がその中心部と言える。城は１郭を中心とした単郭構造で、１郭は割合と広く長軸が１００m近くあると思われますが、削平はきちんとなされていなく、傾斜した地形と成っている。また、西側には B の土塁状地形があるが、緩やかなもので自然を利用した土塁と思われる。１郭の南側には切り通しの通路 C が造られている。この通路は城塁下の位置にあたるため一見すると横堀に見えますが、通路かもしれません。
この通路は１郭の東南端に接した上で、北側に下る D の道と、東側に下りる B の道とに分かれている。B の部分にも一見すると堀切りのように見えますが、間が通路になっているので、これも遺構と言うよりは通路によって形成された地形と思われます。鵤状は、城と言っても規模は小さいが、「堀切」や「堀切久保」、「浦白」（裏城）と言う地名が残っているので、月崎城腰城の裏城或いは琵琶首館の裏の城と言う意味かも知れない。

北側から見たみさご城跡

B の土塁状の部分

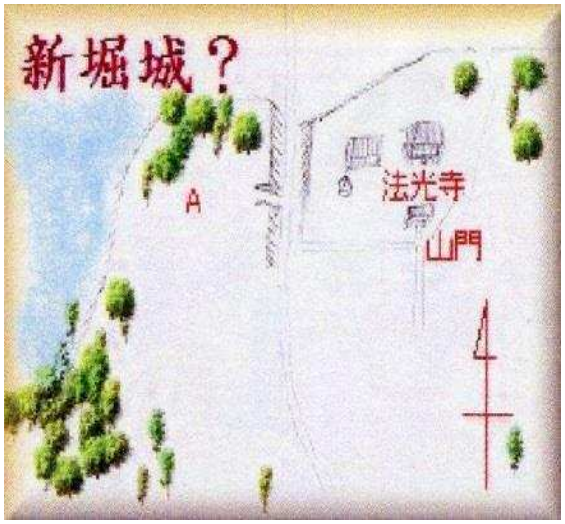
１郭の南下にある C の横堀地形

永藤城（市原市不入斗字堀ノ内、切通、出戸）



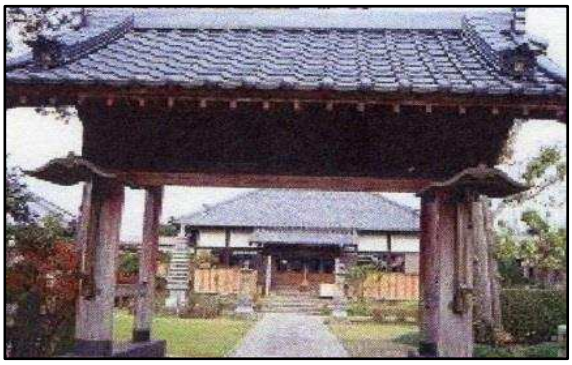
永藤城は、椎津城の東南１，５ｋｍほどのあり、不入斗と椎津にまたがった比高３０ｍほどの山上にあったといわれています。山の麓には西光院という寺院や熊野神社があり、城跡は山林化しているようですが、城跡には土塁や空堀、虎口、土橋、井戸などが残っていると言われています。城の歴史については不明ですが、椎津城の砦のひとつではないかと思われます。山上付近には熊野神社がありその上の台地に登ると、確かに土塁や堀のような窪みが見られるが、良く見るとそれは古墳で、周溝が堀のように見えているようです。この付近には多くの古墳があり、城ではないと思われます。台地は南側に延びていて、途中に虎口のようなものもあったが明確なものではない。しかしながら「堀ノ内」と言う地名があるのは事実で、城館があった場所としてふさわしいと思われる場所を探してみると、D の尾根と E の尾根とに囲まれた谷戸部分には、かなり広い空間があり、ここには何段かの平場が造成されている。また、南北の二つの尾根は、急峻な地形で天然の城壁としての機能をもっているので、ここに城館があってもおかしくないと思う。永藤城も典型的な上総の谷戸式城館に分類されるもので、領主だけでなく家臣や住民も住んでいた可能性も考えられます。

新堀城（市原市新堀字塙台）



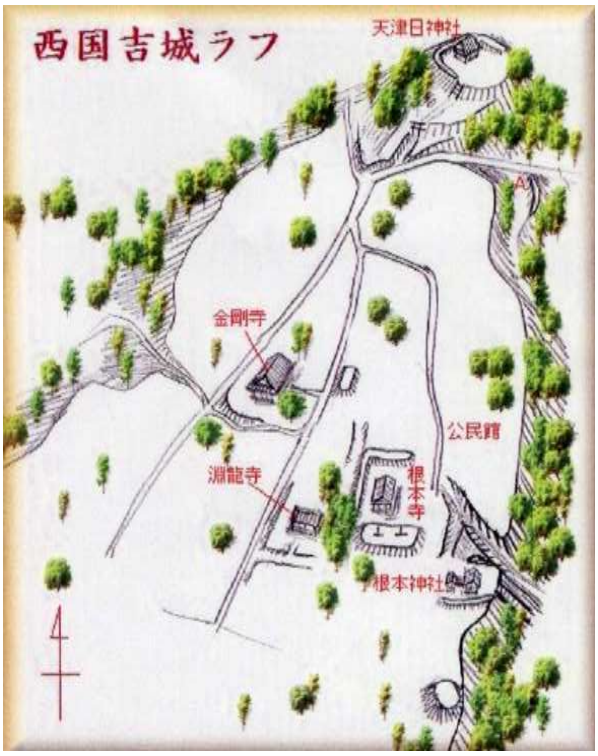
新堀城は、新堀地区の中心部近くで鶴岡病院の東南２００ｍほどの所にある単郭の居館です。比高２～３ｍほどの微高地で、周囲は水田で、かつては水堀だったという。この微高地の西側にも１００ｍほどの微高地があり、城に関連した施設があったと思われます。城主などの歴史は未詳ですが、佐是城を中心とした支城網の一つとして、武田氏によって築かれたものではないかと言われているが、地域の土豪層の居館であったとも思われる。法光寺と西側の台地との間には切り通しの通路になっているが、その西側の台地の土手が土塁状になっている。その先が台地先端部で、塙の地名という地名がついて地形的には要害に当たっている。その下には「花輪下」とも言われ、こうしたことからも城館の存在は間違いはないようです。

法光寺の西側にある台地の土手



法光寺の山門。甘茶寺としても有名

西国吉城（市原市西国吉字根本台、居下）



西国吉城は、南岩崎城の東７００ｍほどのところにある、比高１０ｍほどの台地上にあった。この台地上は宅地化が進みあちこちは改変されているようですが、城跡内にはいくつかの寺院や神社があり、その周辺には何か所かに土塁や虎口の跡らしき遺構が見られる。天津日神社付近が台地の最先端部で、もっとも高い場所で物見台が置かれていた所です。道路を挟んで西側には郭らしい跡もいくつか並び、その南側の根本寺や根本神社の辺りが南端らしく、土塁が巡らされている。西国吉城は、台地全体を取り込んだ広大な城郭であったとおもわれていますが、台地上に見られる遺構の一部は古墳であり、城郭に伴うものとして築かれたものは意外と少ないので、台地全体を取り込むほどの大きな城ではなかったのではないか。根本寺の周辺部には高さ３ｍほどのかなり重厚な土塁が巡らされており、城の中心部は境内であり、台地上で、明確な城郭的な区画を施している場所はこの寺院の周辺で、背後の部分には地面が深くなっている地形があり、堀が掘られていたのではないかと思われます。根本寺の南側の土塁は上の幅が広く、もとは古墳ではないかと思われますが、これを櫓台として利用していたと思われる。また、根本神社の周囲にも土塁が巡らされており、台地の東端部には物見台的な機能を

有していたと思われます。また、周囲の土手は急峻であり、城の塁としては申し分ないものです。台地の北端部には天津日神社が祭られていて、城の北東部にあたる所から、鬼門除かの意味があったようだ。神社の脇から台地下に下りて行く道があり、その脇右手に横堀状に見える地形Ａかある。Ａが横堀であったとすると、この台地まで加工された城であったと思われ、築城年代は戦国末期近いと思われます。
城主などの歴史は未詳ですが、武田氏によって築かれたものと思われます。

根本寺東側にある土塁

根本寺西側にある土塁

天津日神社入口の切り通し

根古屋城（市原市平蔵字根古屋）

根古屋城は、平蔵城の７００ｍほど南にある。平蔵城との関係は不明ですが、城址は八幡神社の背後の台地に築かれていたと思われます。浅間山と呼ばれている比高５０ｍほどの山で、城址の大半は山林化している。この山中に段階的に郭を構えた城のようだ。上杉禅秀の乱の後、禅秀側の残党たちが戦ったいわゆる「上総本一揆」で、一揆側の立てこもったと思われるは「平三城」と記されていますが、一揆後も平蔵城は存続していることから、根古屋城は立てこもった平三城ではないかと思われる。
城主は、榛谷小太郎重氏であったという。榛谷は意気揚々として籠城したが、一揆勢討伐軍の一色左近将監、鹿島出羽守、畑田遠江守らの大軍を支えきれず、城は落城したと言われています。
八幡神社は比高３０ｍほどの急峻な台地先端部に建っている。神社のあるスペースは長軸３０ｍほどあり、ちょっとした郭があってもいい広さです。神社の南側は削り残しの土塁のような地形になっている。この土塁から西側の尾根上に向かう道が付いていたが、現在は神社の北側に新しい切り通しの道が出来ていて、上にある祠につながっている。

また、尾根続きにあたる西側に何の分断施設がないのが不思議な造りです。堀切りなどがあれば尾根伝いに攻めて靴的を防げると思うがそれらがないとすると、尾根がわからの敵の接近はないと思ったのか。このような状況では本当に城だったのか、また、臨時の城として砦程度として築いたのか不明です。

八幡神社の南側に土塁状の物がある

北側に延びた尾根部にも土塁が見える

根田城（市原市根田２丁目）

根田城は、根田２丁目の交差点や「根田」というバス停のある辺りの北側にあったと言われています。現在は宅地化の為に遺構などはなくなっている。１９６０年の航空写真で見ると、城跡辺りにラフ図のような地形が見える。長軸１００ｍほどの楕円形に近い区画で、周囲には堀のようなものが見られる。これが根田城跡と思われる。郭内にも何軒もの建物が存在していた環壕集落のような可能性がある。

能満城（府中城）（市原市能満字城山）

能満城は、里見義秋堯が前線基地として築城されたもので、市原城の出城として白船城と兄弟城としての機能を持った城で市原城の８００ｍ東南の方向に築かれていた。比高１５ｍほどの台地上の奥にあり、府中日吉神社の所から北に向かって細い道を入ってゆくと、森の中に土手が見えます。虎口付近には「能満城跡」と記された標柱が建てられており、その奥に主郭部分と思われる。虎口の両側は５ｍほどの土塁になっている。主郭部分はその中で５０ｍｘ１００ｍほどの広さで、周囲にもいくつかの郭があったと思われます。城としての防御性は高いようですが、府中日吉神社の北側には明確な堀などの遺構は見られず、北側に細長く突き出した台地をその城域として、台地基部に当たる南西部と南側を堀と土塁によって区画した単城と思われます。堀の南側と西側を通る道は、いずれも切り通しの道路になって台地下に降りて入っている。

南側の虎口に建てられている標柱

虎口の両側には３ｍほどの土塁

左の土塁の外側下の切り通

葉木城（市原市葉木字舞台山）

葉木城は、犬成城の西側２ｋｍほどの所に築かれていた。城址の一部を「うぐいすライン」道路で分断されているが、比高２８ｍほどの南北に細長い台地で、麓には妙見寺と妙見神社が建っている。城主などは不明ですが、犬成城との関係はあったと思われます。妙見寺の北側に細長い２郭があった。郭内には、古墳もいくつかあり、これが土塁代わりに利用されていたと思われる。道路の反対側には、やはり古墳を利用した物見台があり、その下には腰曲輪が、やや東側に空堀が存在をしている。実際台地上には、２０ｍｘ５０ｍほどの１の平場が広
がっており、その西側の先にはＡの土塁が気づかれていて、
には Ａ 城跡らしく見えます。土塁の幅は結構広く、角の部分は櫓台とも思える広さがあります。南西角の隅には、３ｍほどの円形の窪みがのろしを挙げる場所とも思える。このような地形から実質的に郭は１つで１の部分だけと思えます。また、地元の方の伝承では「城と言っても陣屋程度のものが建っていたのではないか」との話で、妙見神社の存在を見ると千葉一族に関連した城館とも考えられます。また、「舞台山」と言う名称も気になる所で、昔神事に関わる催し物が行われておりその舞台として使われていたとも思われますが、地元の方はその由来については不明でした。

南方から見た葉木城のある台地

千葉一族と関係のある妙見社

Ａの重厚な土塁だが堀はない

畑木城（市原市畑木字要害山）

畑木城は、姉崎高校の東側にある比高２０ｍほどの独立台地にあった。この山は夕害山と呼ばれていますが、夕害は要害のことと思われます。その為に畑木城は要害山城とも呼ばれており、姉崎高校の西側の台地にあった姉崎台城と共に椎津城の出城で、連絡道もあったと言われています。城の形態についてはなんとも理解しにくいが、台地の先端部はかなり広い畑地なっていている場所に主郭部があったと思われますが、土塁や堀切などの遺構はないようですが、台地基部がネック部のように細くなっているので、ここに堀切を入れれば分断も出来るのですが、そのような跡は残っていない。台地東側の数段の腰部は城郭に伴うものとも思えますが、畑作の後かもしれない。中世畑木城の伝承は定かではないが、幕末期の戊辰戦争では、官軍と義軍との戦いで幕軍の梶塚成志と言う武士が奮戦し、６人もの

敵を切り倒したが、官軍の凶弾に遭って倒れてしまったと言われ、彼の墓は近くの寺院にあると言われています。

北側の県道から見た畑木城

１郭の北西端にある土塁跡

原田城（市原市原田字金谷辺田）

原田城は、真ケ谷城の南西６００ｍほどの所にある比高３０ｍほどの台地の先端に築かれていた。台地上の平坦地と腰曲輪、古墳を利用して櫓台などが造られている。原田城は、城址研究家の小高氏が、金谷辺田地宇地名を手掛かりに見つけた城で、伝承や城に関する歴史は全くない。尾根上に登ってみると長軸９０ｍほどの平坦な１郭があり、きちんと削平された郭です。尾根続きの東側には、古墳が１基あり、土塁としてそのまま利用したと思われます。古墳の東側にはやや窪んだ場所があるが、堀切とは見えないが、側面に切岸とそれに生じた腰曲輪を配置し、西側の先端部は切岸加工を施したため、数段の小郭が連続する構造になっている。このように側面と西側にはきちんとした防御施設が見られるが、東側の尾根続きにはたいして防御意識がないのは不思議ですが、こちらからの敵の攻撃はないと思ったのかも知れません。１郭の西側にも古墳があり、その先には堀底のような場所Ｂがある。その先が土壇状に高くなっていますが、ここは一見堀底のようにも見えるので、幅１０ｍほどの堀切の一種と思えます。原田城は、規模もさほど大きくはないし、城主などに関する伝承も不明なことから、戦国期前半ころまでに臨時に築かれた城と思われる。

南側から見た原田城祉

１郭西側の古墳と堀底状窪地

１郭西側の古墳と堀底状窪地

引田城（市原市引田字西根）

引田城は、万代城とともに、神代城の南部の台地上に在り、いずれも神代城の詰め城だったと言われています。引田城は比高２０ｍほどの半島状台地の先端部にあったが、現在では遺構などは見当たらない。引田城は、蓮蔵院の南西側背後の比高２０ｍほどの山上にあった。空堀、土塁、虎口なども残っていると記されているが、周辺の地形を見てみると、ここに城があったと言えるような遺構は発見できず、西根と言う地名だけでは城跡とは言えないと思われる。

百枚田城（市原市不入斗字百枚田）

百枚田城は、永藤城の東南３００ｍほどの所にあった。有秋中学校の背後の比高３０ｍほどの独立台地の上が城跡と言われています。城跡には、土塁、空堀、虎口などが遺されている。城史などは明らかではありませんが、永藤城に極めて近い所に築かれていることから、出城であったと思われます。台地には２段ほどの平場が確認でき、１よりも奥の方に土塁や空堀があったと言われています。

平蔵城（市原市平蔵字城山、要害、根古屋）

平蔵城は、平蔵橋の西側にそびえる比高６０ｍほどの平蔵山に築かれていた。橋の脇から城跡に登る道があり、山頂付近には段階的に平坦地が郭の跡と思われる。城主は、土橋平蔵で、伝承によると平蔵は、平将門が反乱をおこした承平年間に紀州からこの地へと来たというが不明です。城主は代々「土橋平蔵」を名乗ってこの城を居城としていたのは確かですが、土橋平蔵将経は、城の守護の為に鬼門に当たる城の東北の平坦地に「西願寺」を建立した。その寺の観音堂が「平蔵の金堂」と呼ばれるお堂で、国の重要文化財に指定されている。吉沢城に弥陀堂と良く似た建物がある。山頂の１郭は、１０ｍｘ３０ｍほどの細長い郭で、中央に盛り上がった部分があり、また、北側には土塁のようなものがある。郭内は一応削平されているが、それほどきちんとしたものではない。東南の端には井戸の跡のような窪みがある。また、東南の端がわずかに掘り切られたような部分が虎口と思われる。郭は、２、４、５などと段々と成っていて、この辺りを「阿弥陀畑」と呼ばれており、かつては阿弥陀堂などの施設はここにあったものと思われます。４の郭の北側には土塁と虎口がある。３の民家の奥には尾根続きで、その途中に堀切を入れ、北側にその尾根を向かうと「城部田城」の方にも行くことが出来る。平蔵城は、平坦な段々を郭として配置しただけの単純な構造の城郭ですが、郭の数はかなり多く、多くの人数が籠城することも想定した城で、「要害」「根古屋」と言った地名からも、戦国期の城であることは明らかであり、ある程度拠点的な規模の城ということが出来る。

城部田城方面から見た平蔵城

西願寺の阿弥陀堂（重要文化財）

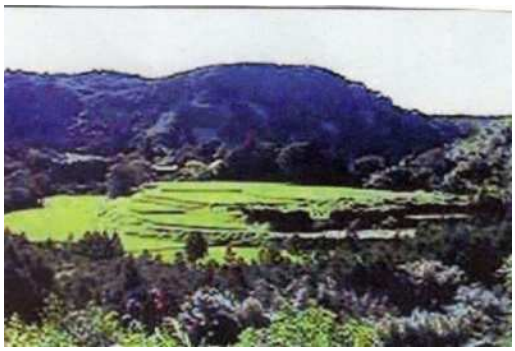
多くの段々地を登って城址へ

平蔵城部田城（市原市平蔵字城部田）

平蔵城の北側に城田城が築かれていた。台地の基部が平城城とつながっており、出城として築かれたものと思われます。台地の先端部には８０ｍｘ１５ｍほどの北側に向かったＶ字型の主郭と思われる郭があり、そのＶ字型に開くような構造の付け根の部分が、見事な内が枡形になっている。周囲には何ヵ所かの腰曲輪がある。主郭から台地の基部に向かって２つの細長い郭があるが、その間には空堀が掘り切られている。この下の斜面には大規模な堅堀のような３つありますが、規模が大きいので自然地形とも思えますが、その横が縦土塁状なっている部分もあり、ある程度加工して、斜面の横移動を防げるという効果を狙っていたようである。Ａの部分から北側に向かうとＢの外枡形の部分にでるが、ここがちょうどＶ字の開口部になっていて、登る道が付けられている。城塁はＶ字に延びているために、この登城道は両脇からの城塁からの攻撃にさらされるようになっているので、かなり堅固な虎口になっている。この内枡形を越えるとさらに低い城塁による内枡形がある。このように戦国期の虎口は非常に厳重で技巧的に造られていたようだが、ここまで巧妙な虎口はこの地域の城ではとても珍しく、誰がこの虎口を築かせたかが興味深い所です。１郭の北側には堀の２があるが、堀というよりは腰曲輪に近い形状ですが、北の縁にかなり大きい土塁が築かれているので、自然と堀切状になっています。その北側には高さ７ｍほどの切岸となってさらに大規模に掘り切られて、２岸の堀切になっている。

この南側には自然地形の尾根となっているので、城域の北端はここまでと思われます。１郭の西側下にも腰曲輪があり、西側に延びている所が２か所あり、その先端を切岸加工され、下に浅い堀切を伴っています。これもかなり念の入った構造で、尾根や腰曲輪の下もしっかりと切岸加工されているが、所々崩落もあるので、どこまでが旧状の通りかは判別しにくい面がありますが、全体的にはかなり急峻に加工されている。１郭の南端に堀の４があり、深さ７ｍほどの規模の大きな堀切です。この堀切から南側には細い尾根が平城城の方に向かって延びている。所々に切り岸状の段差も蟻、これを１００ｍほど南下していくと堀の５の所に出ます。この堀切は深さ７ｍほどですが、粘土質の部分を掘り切っているために、垂直面からは全く取りつくことが出来ない堅固なものとなっていて、その東側下には堅堀が掘られています。

このように城部田城は、それほど大規模な城ではないが、かなり深い堀切や二段の堀を入れ、また、虎口は何重にも枡形を重ねた造りといった具合に、かなり技巧的で手の込んだ城です。伝承は特にありませんが、戦国期にそれなりの城郭構築技術を持った者によって築かれた城と思われます。郭の面積に比べて、防御遺構が豊富なことから、領主の居館と言ったものでなく、戦時に際しての砦として築かれたものと思われます。



東側の国道からみた城部田城

西側先端部の切岸加工の平場

東側の国道から見た城部田城

１郭下の段差の腰曲輪

１郭の南側の深さ８ｍの堀の４

深さ７ｍほどある堀の５

尾根の両端は削られ登れにくい

見事な内枡形の腰曲輪

琵琶首館（市原市田淵字百尾）

琵琶首の館は、養老川が陀行し、琵琶の実の形をした地形の根元部にあった。里見氏７代の義弘は最初実子がなく、弟の義頼を後継者に定めたが、後に梅王丸という実子を授かることと成り、死に臨んで義弘は「義頼は安房を、梅王丸は上総を領するように」との遺言を残して言ったが、安房よりも上総の方が所領が多いことに不満を抱いた義頼は、梅王丸を無理やり出家させて、自身で里見の全所領を受け継いだ。この時、梅王丸の母と姉が、畝王丸側の武将に胆がれることを恐れた義頼は、この二人を幽閉することとした。こうして二人は琵琶首の館に死ぬまで幽閉されたと言われ、畝王丸が幽閉されたという伝承は現在では信ぴょう性は薄く、母と姉が幽閉されたというのが事実のようです。

琵琶首館は、前記のようにかつては蛇行する養老川の断崖に囲まれた要害の地にあった。現在は西側の台地基部にトンネルを掘って流路を直進させているので、川の流れは変わってしまった。この台地の比高は１０ｍほどでしかありませんが、三方が崖であり、西側の台地基部方向は岩盤がむき出しの断崖となっており、城館を築くには持って来いの場所で、幽閉所としても適した場所と思われる。この台地の基部付近には、里見梅王丸を弔うために建立された満蔵寺があったと言われています。なお、西側にそびえる断崖の山を「城山」と言い、館の監視所が置かれていた所もあるという伝承もあるが、城郭らしい遺構は見当たらない。

奉面（ほうめ）白山城（市原市奉面字白山）

奉面白山城は、小湊鉄道の上総牛久駅の北側１，２ｋｍの所にある比高３０ｍほどの台地上にあった。城跡には、土塁、空堀、虎口などが残っていると言われているが、それらしいものは発見できない。南側の麓には、熊野大権現神社、北側中腹には満蔵寺という寺院がある。伝承によれば、永禄・天正の頃、露崎大蔵源義基という者が居城していたと言われていますが、この人物がどのようなものかは明らかではない。奉面の熊野神社背後の比高３０ｍほどの山稜が白山城の跡です。山中で一番目立ったのは、Ｂ の部分にある切り通しの道で、この切り通しは西側の山麓に続いているもので、深さは６ｍほどあり、見方によっては見事な堀切とも思える。しかし、これに面する左右のいずれの部分のが、城の郭と呼べる地形にはなっておらず、城の防御施設とは考えにくい。ここから北側の山稜に続く道が、小規模な切り通しの虎口状態になっている。その両脇が土塁状と言ってもいい地形で、空堀、土塁、虎口と記されているのはこの地形をいっていると思われますが、全体的に見て行くと城跡と言われた場所も特定できず、人工的な構造物もみあないので、他の場所の山麓付近に露崎大蔵源義基の居城があったのではないかと思われます。

本郷明金城（市原市本郷字明金）

本郷明金城は、小湊鉄道「里見駅」の北側４００ｍほどの所にある、比高８ｍほどの低くて平坦な台地上にあった。城跡は宅地や畑になっているが、土塁、空堀、虎口、食い違い虎口などが残っている。しかし、城主などについては不明です。城跡の東側に西光寺と言う寺院があり、西側に向かい合う一帯に「本郷明金城」の範囲の記しが付けられている。しかし、広すぎてどこが城跡か正確な場所をつかむのが難しい。西光寺の下から、谷戸部を隔てて西側の台地の縁部辺りが最も城館を築くのにふさわしい場所と思われる。西側にある民家の敷地内には土塁のようなものが見受けられるが、ここが城跡なのかは分からない。この台地に登って行く部分は、やや虎口状になっている。山上の

A 部分に残る塚跡

B の北側の虎口跡

かつて旧道の B の堅堀状部分

東側山麓にある民家や、その北側の墓地などの土手の上がなんとなく城館らしく見える部分があるが、この部分をもって「城」と言っているようだが、現状では良く分からない。その近くには、本郷堀之内館跡がある。堀之内館は、西光寺の辺りにあったと思われるが、現在では明確な遺構を残していないが、この辺一帯を「堀之内」と呼んでいて、中世城館が存在していた場所と思われます。また、西側の谷戸部にはかつて堀があったと伝承されている。そのようなことから、西光寺のある周辺に城館があったと思われます。また、台地東の高滝湖に面する部分も、周囲よりも一段高い地形になっており、北側の谷津が B の低い水田となっている台地上に切れ込んでいて、ここより東側にある部分も城館を築くのにふさわしい地形なので、ここに存在した可能性もある。

南岩崎城（市原市南岩崎字報恩寺台、榎木、本郷、小勝山）

南岩崎城は、武田氏の城の一つであり、報恩寺というのも武田真理谷入道如鑑の菩薩を弔い、その恩に報いると言う意味で営まれた寺院であったと言われています。この土地は真里谷城と上高根城の間にあり、つなぎの城と言う意味合いもあったと思われます。また、佐是城にも近く、何らかの関係があったと思われます。

南岩崎城は報恩寺のある比高２５ｍほどの台地上にあったが、台地は宅地化や霊園の造成などでかなりの部分が改変されているが、報恩寺周辺にはそれらしい遺構らしいものが存在をしている。A は、前方後円墳らしく、その周囲には堀が掘られていたようで、現在もその痕跡がはっきり見えている。報恩寺の東側の堅堀 B からクランクしながら南西に延びて行く切り通し状の通路も堀の名残りと思われる。一部が古墳の周溝を利用しながら、さらに堀を伸ばして言ったようです。堀の残存状況は断片的ですが、台地上は広大な台地を区画する為に、堀も各所に長く延びていたらしく、南岩崎城はかなり規模の大きな城郭であったと思われる。

古墳の周溝を利用した堀底道

古墳の先端下にある堀切跡

B の北側の堀切の跡

皆吉城（市原市皆吉）

皆吉団地の東南側の比高５０ｍほどの広大な山地が皆吉城の跡と言われています。城跡には、土塁などが残されていると言われていますが、城主などについては不明です。

皆吉堀之内館（市原市皆吉字堀之内）

皆吉堀之内館は、皆吉城の東側の麓に在り、堀之内地名から皆吉城の平素の居館が営まれていた所ではないかと推定されています。詳しいことは分からないが妙蔵寺の辺りが、その推定地と言われていますが、遺構などは不明です。

皆吉橘禅寺城（市原市皆吉）

皆吉橘禅寺城は、橘禅寺がある比高４０ｍほどの台地上にあった。橘禅寺は、由緒ある寺院のようで、ここには千葉県指定の有形文化財の木造金剛力士立像や木造薬師如来坐像などが残されている。弟橘姫神社のある付近が城跡の最高所で長軸４０ｍほどの円形で、西側に主郭か物見台が置かれていたと思われます。その下の橘禅寺のある所が一番広く、長軸が８０ｍほどある２郭があったようだ。この郭の周辺には腰曲輪が造成されており、２郭と３郭との間には登城路があったと思われます。現在、車道と別の通路が存在をしていないようなので、２郭の斜面を斜めに上がって行く坂虎口があったようだ。さらにその下に平和の像が建つ郭があり、３郭ほどが認められる。城主や歴史については明らかではない。

北側見た橘禅寺のある比高４０ｍほどの山

１郭から２郭にある神社を見た

１郭下の道から２郭を見た所

１郭の一番奥に見える櫓台

村上城（市原市村上字堀ノ内）

村上城は、鎌倉時代の宝治合戦（１２４７年）後に、足利氏が上総守護となってからで、足利氏の被官であった村上氏もそれに伴い移住をしてきたと言われています。南北朝期になり、大永元年（１５２１年）には上総守護代として「村上大蔵大輔義芳」が居城していたと言われている。村上氏は、出身は信州のようで、八千代市米本城の村上氏とは関係があるようです。地名の「村上」も、村上氏の苗字にちなんだ物のようです。時代が降りて、１６世紀になると村上氏は小弓公方に従っていたらしいが、小弓公方滅亡後は原氏らと共に、北条氏に属したと言われています。おそらく椎津氏らと同様、上総地方の在来勢力として、里見氏の北上を食い止める役割を担わされていて、有木城の攻防戦などにも絡んでいたと思われます。また、永禄７年（１５６４年）の国府台合戦後、北条氏によって久留里城が攻め落とされた時、一時的に北条氏の手に落ちた際に久留里城の城代を任されたのが村上氏であったという説もある。となると反里見連合の中でも、村上氏はある程度の勢力を保っていたと思われます。ここが村上氏の居城であったのは、中世初期段階までと思われ、戦国期にはもっと大きな城に移ったとも言われています。

村上城は、観音寺と言う寺院の南西側に堀ノ内と言う地名があり、この辺り一帯に村上城があったと言われる。堀ノ内より北側にも土塁が延びており、集落や堀跡らしい地形が見られることから、実際には複数の郭を有した平城であったと思われます。また、堀ノ内の東側の水田地帯の中には微高地があり、その間の低地は、一見すると堀跡とも見える。こうした地形からこの微高地が郭であったかも知れません。また、南側の永昌寺の内にも土塁が残されており、これが城の遺構という説もあるようですが、調べた結果は、城跡の遺構とは違うようです。

堀ノ内の東側から見た城跡

宿地区の東側の水堀跡の水田

堀ノ内北側の切り通し跡

山倉城（市原市山倉字堂谷）

山倉城は、子どもの国の南６００ｍほどの山中にあった。春日神社の辺りが城跡と言われている。比高３０ｍほどの台地上ですが、集落から奥に入った山深い所にあった。神社の全面はかなり急斜面になっているが、その周辺の地は、郭のような削平地でもなく土塁や空堀などの遺構も残ってはいない。春日神社のある部分は、下の平場から１０ｍほど高い位置に在り、居館などを営む程度の広さはある。また、その下の駐車場やＡの平場などは、完全に谷戸内部であり、かつての屋敷の跡とも思えます。これは一種の谷戸式城館と言える。神社駐車場の脇から台地に上がって行く部分の車道が大規模な切り通しになっており、現状では最も遺構らしいものと見える。

山倉の春日神社

北東側の堀切で、通路として利用

山口城（市原市山口。養老）

山口城は、小湊鉄道高滝駅の北西９００ｍ、山口地区と養老地区にまたがった比高２０ｍほどの半島状台地にあったと言われているが、小高春雄氏によると「ここは城跡ではない」との指摘を受けたが、この地域に「駒込」「馬場」「弓寄」と言った地名があるので、あったと言う前提で紹介をします。

山口城のあった台地は、南北に長く連なっており、台地の下には、長泉寺、八坂神社、大地菩薩院などがある。台地上は、山林化しているが、郭や土塁、空堀、虎口井戸などが残っているようです。山頂部分の地形図を見ると、基本的には尾根ばかりで、ここに城館があったとすると東側山麓の集落地帯に居館があった、いわゆる谷戸式城郭だったと思われます。鎌倉時代の説話「沙石集」には、高滝の地頭とその娘が熊野詣でをしたという話が記載されている。そのことから、この近辺には古くから有力な豪族が存在していたと思われます。その豪族が山口の地蔵を維持していたとも言われていますが、このような豪族の居館がこの辺りに存在していたとすれば、山口城の実際にあったとも思える。

地蔵堂の背後の山麓が城址と言われる

高さ２．７ｍの木造地蔵菩薩坐像

山小川城（市原市山小川字上の台、前堀、後堀）

山小川城は、高滝湖の東２ｋｍ、吉沢城の北側２ｋｍの位置に在り、伝承によると、応永時代に平朝臣方秀広秀という武将が居城していたと言われている。城址と言われている場所の近くには長泉寺と言う寺院があり、この南側の比高３０ｍほどの台地が山小川城であった。台地は東に向かって突き出した半島状のもので、東側は小草畑川の絶壁になっている。城跡は円形状郭で、空堀などが残っている。また、長泉寺の北側の墓地になっている高台の平坦で広くなっており、ここにも郭があったとも思える。Ａ の台地の南側端部には削崖した跡が見られるが、城郭を加工した跡かと思われます。西側の台地との間には幅２０ｍほどの谷戸部が広がっており、堀としていたとも思われます。しかし、駐車場Ｐとの間には、掘り下げられたような跡が見られ、その間にＢの土橋状の部分もあるが、どちらもその辺りの削り方が城の堀のようにも見える。この土橋が間にあることから、これを前堀、後堀と言っているようです。

山田城（市原市山田）

山田城は、小湊鉄道の山田駅から８００ｍほど西南、国道２９７号線のすぐ西側にあったと言われています。この辺りの宅地の周辺には、正覚院と言う寺院や、廃寺になっている佛蔵寺などがあるこの辺りが城跡と思われます。土塁らしい土手はいくつか残っているが、確実に城郭的遺構かどうかは確認できないが、地元土豪層の居館があったと思われる。

米沢中野城（市原市米沢）

米沢中野城は、奉免白山城と真ケ谷城の中間点の位置にあった。両城のつなぎの城か、物見台があった所とも思えます。国道４０９号線の「安久谷」のバス停の所から細い道を山の方に向かって行くと、右手に池があり、その向こうに見える比高５０ｍほどの山が城跡と言われています。城跡には、土橋などが残っていると言われているが、登城口は発見できなかった。

分目要害城（市原市分目字要害）

分目要害城は、分目のバス停のすぐ南側、慈眼寺や雷光大明神のあるあたりにあった。城主に在っては、村上氏や椎津氏が城主であった可能性か高いが、分目氏が村上氏か椎津氏の関連した一族ではないかとも考えられる。このことは、分目家の古い家系図や巻物に記載をされているようです。

分目要害城の一部は崩されてしまっているが、堀の跡と思われる部分も残されている。当初は比高５ｍほどあった水城といってもいいような構造をしていたと思われます。概念図によると、５郭ほどが認められ、かなり整った

形の城であったようです。馬出しの郭も見られる。

正面奥側が土塁跡。道路で一部は削られている

北側から見た１郭城塁跡

この資料作成に当たり、以下の資料を参考に致しました。

・中世日本の城郭
・千葉県中近世城跡研究調査報告書
・千葉県の城　Wikipedia
・千葉県のお城一覧―城郭放浪記
・千葉県の城の余湖
・日本の城

制作、編集　上総の国いちはらの歴史を知る会

住所　千葉県市原市能満１０２０番地１
連絡先　０９０－３５４５－１１１３
Ｅ－mail　bousaiya0119@yahoo.co.jp

この資料が必要な方は、上記連絡先に TEL 又はメールで連絡下さい。
ダウンロードアドレスをお知らせします。